



Wetter Roland hatte, wie alle Welt weiß, seines Oheims Kaiser Karls Kriege mit Glück und Ruhm geführt und unsterbliche Taten getan, von Dichtern und Romanziern besungen, bis ihm

ヨハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著

鈴木 満 訳・注・解説

〔その巻〕

どなたもご存じ、⁽¹⁾皇姫ローラントは伯父の皇帝カールの数々の戦役に参加、功名手柄をあげ、詩人や物語作家に謳われる不滅の偉業を成し遂げた。そしてついに、裏切り者のガネロンのために、ピレネー山脈山麓のロンスヴァルで、サラセン人に對する勝利と、自らの生命を奪い取られたのである。彼は、嘲罵を浴びせて一騎討ちを挑んできたシリア人、ゴリアテの後裔で工

ナクの息子である巨人フェラクトウスを仕留めたが、それが何の役に立つたことか。そのあと不信者どもの偃月刀の刃に殲たおれなければならなかつたからだ。愛剣デュランデはこのたびは身を守つてはくれなかつた。なにせ彼は英雄の生涯を翔け抜け抜けてその最期に行き着いていたのだ。討ち死にした夥しい死骸のあいだで、重い手傷を負い、焼けるような喉の渴きに苛さがめながら、だれからも見捨てられて彼は横たわつていた。こうした酸鼻さんびなありさまとなつたローラントは、カールに今生の別れを告げるため、渾身の力をふりしづら、所持の不思議な角笛を三度吹いた。皇帝は麾下きかの軍勢とともに戦場から八哩マイル離れたところに露營していただが、不思議な角笛の響きを聴くと、折しも切り分けられたばかりのうまそうな肉饅頭ヌードルの匂いに涎よだれを流していたおべつかいの廷臣たちは大いに憤慨したけれども、ただちに食事を中断、すぐさま軍を進発、甥の救援に急行させたが、時すでに遅し。というのは、ローラントがあまりにも勢い込めて吹いたので、黄金の角笛は裂け、頸筋の血管がすべて弾け、雄々しい胸はすでに呼吸いきを止めていたからだ。さてサラセン人たちは勝ち戦をことほぎ、自軍の大将にマレク・エル・ナスール、つまり「勝利王」の称号を贈つた。

乱戦のさなか、豪胆なローラントに仕える盾持たち、武具運びたちは、主君が敵の密集部隊の真っ只中に身を投じたので、間を隔てられ、姿を見失つてしまつた。やがて華武者はなぶしが仆れ伏し、意氣沮喪モモチしたフランク族の軍勢は命を助かるうと逃げ散つたので、家来たちの大半は灼けた鉄鍋に放り込まれたようなもの、徹底的にやつつけられた。退き足が早かつたお蔭で、討ち死にの災厄、あるいは奴隸として鎖に繋がれる憂き目を免れたのは、一隊のうちでたつた三人に過ぎぬ。この悲運の三人連れは山中深く、人跡未踏の荒涼とした地帯に一目散、背後を振り返りもせず逃げ続ける。なにしろ、死がうしろから駆け足で迫つてくる、としか念頭にない。喉の渴きと照りつける太陽の炎熱に疲労困憊へきぱい、とある蔭濃い樺の樹の下に休もう、と座り込んだが、ひと息入れると、これから何をやるか、額をあつめて

相談を始めた。佩劍持ちのアンディオルがまず口を切つて、まづくらさんぼう逃げるのと、サラセン人怖さとで守らざるをえなかつたピュタゴラス学派的寡默（無言の行⁽³⁾）を破つた。

「どうしたものかな、兄弟」と彼が訊ねる。「不信者どもの手に陥ちずにつよく軍勢にもどるにはよ。それにどの路を通るべい。ひとつこの荒れた山んなかを抜けてみてるかな。おらあ思うに、この山の向こうつかわにやあフランク族^{アーヴィング}が棲んどる。きっとおれたちを陣地まで案内してくれようぜ」。

「おめえの考えはけつこう毛だらけ、と言えようがな、朋輩^{伴は}」と盾持ちのアマリンが応じる。「おれたちに鷺の翼をくれるつちゅうならだ。そうすりやこの屏風みてえな険しい岩山をひとつ飛びで越えられら。だが、ひもじまとおれんとさまの熱のせいで體が吸い出されちまつたこのぐにやぐにやの脚じやあ、おれつちとフランク族の隔てになつてるぎざぎざの崖を攀^{スル}じ登るには難儀だろうて。なによりも先ず泉でもみつけて、喉の渴きを鎮め、水浴れの瓢箪を一杯にしてよ、そのあとなにか獣をやつつけて、歯に触るものを手に入れよう。それからはしご^{カモシカ}羚羊みてえに岩をぴょんぴょこ跳ね越えてくのよ。すぐにカールの陣場へ行く路がみつかるだろうぜ」。

三番目の従士のザルロン、これは騎士ローラントに拍車をつけるのが役目だつたが、首を振つてこう言つた。

「あさまの意見は、なあ仲間、胃の腑^ふのためには悪くねえ。けどな、きさまら一人の言うことは、頸根つこにやあ剣^{ハサウエ}吞^{スル}至極だて。おれたちがご主人さま抜きでもどつたら、おまけにおれたちがお預かりしてたりつばな物の具も持つて帰れなかつたら、カールはおれたちに恩義を感じるとでも思つてゐるのか。おれたちが玉座の絨^{じゆう}毯^{たん}の端に跪^{ハムカツ}いて、『ローラント様は討ち死になされました』と言上するだろ。するとカールはこうのたまうかな。『まことにいとわしい報らせじや。したが、あれの愛劍デュランデはどこにある』。それになんて答えるつもりだ、アンディオル。それともこう言つかな。『従士ども、あれの鏡のように輝く鋼^{はがね}の盾はどこに置いてある』。そしたら、それになんて返事す

るつもりだ、アマリン。それとも昔カールが肩打ちをして殿様を騎士に叙任したとき、殿様につけてやつた黄金の拍車のことを訊くかもな。となると、おれは恥ずかしくって口が利けねえだろが」。

「よくぞ気がついた」とアンディオルが受ける。「おぬしの賢さはローラント様の盾みたいに光つとる。ローラント様の剣みたいに斬れ味がいいし、特上だし、鋭いわい。フランクの陣営にはもどらねえことにしよう。カールはかんかんになつて、おれたちを修道誓願させて、乾涸らびた坊主どもの仲間にするかも知れねえ」。

こう相談しているうちにぞつとするような夜が忍び寄っていた。霧に煙る空には小さな星ひとつ瞬かぬ。そよとの風も起こらない。広漠とした荒れ地には深い死の静寂がたちこめ、時折なにか夜の鳥のざやあつという啼き声で破られるだけ。三人の落ち武者は櫻の下の芝草のうえに手足を伸ばし、その日一日の厳しい断食がかきたてた激しい空腹延ばすのに好い顔はしない。くたびれきつていたけれども、飢えは彼らを眠らせてくれない。剣帯を空腹我慢の腹帯を眠つて紛らわそうとした。しかし胃という奴はひどくごうつくぱりの借金取りで、貸金の支払い期限を二十四時間代わりに使って、そいつができるだけぎゅうっと締め上げたのだが。どうにもおもしろくないし退屈もあるので、彼らがまたおしゃべりを始めていると、茂みを通して遠くに小さなあかりが見えた。最初は硝石や硫黄の蒸気のはぐれ靄だと思っていた。けれども鬼火にしてはしばらく経つても位置も明るさも変わらないので、これを詳しく調べに行こう、と衆議一決、櫻の樹の下の屯營を離れた。真っ暗闇のなかでごろた石から何度も足を踏み滑らせたり、大枝に何度も頭をぶつけたり、さんざん苦労をしたあげく、ようやく辿り着いたのは、垂直にそり立つ岩壁の前に開けた空き地で、なんとも嬉しいことには、三脚に載つた料理鍋がそこで火にかけられているではないか。その燃え上がる炎に同時に気づいたのは洞窟の入口。上から蔦の蔓が絡み下りていて、堅固な扉で閉ざされている。洞窟の住人は客あしらいのよい信心深い隠者かなにかだろう、と推量したアンディオルは近づいて、ほとほと叩いてみた。けれ

ども中から聞こえたのは女の声で、こう訊ねる。

「だれだね、叩くのは。だれだね、あたしのうちの戸を叩くのは」。

「おかみさん」とアンディオル。「岩窟の扉を開けてくだされ。門前におりますのは、道に迷つた三人の旅人でしてな、喉の渴きと空腹に苦しんでおりますのだ」。

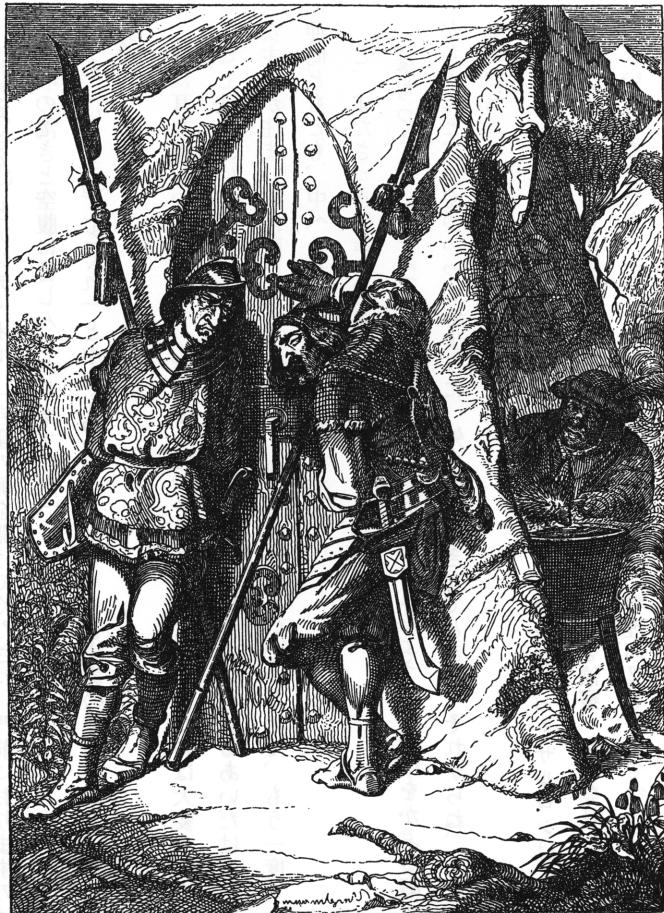
「ちよいと辛抱しとくれ」と中からの声。「あたしや、まず家の整理をして、それからお客様をもてなす用意をするから」。

扉に耳を押しつけていたアンディオルに、それから聞こえてきたのは大変な物音。うちじゅうを片づけて、床をござごし洗いあげてでもいるかのよう。じれったいのを抑えていられるあいだは、しばらくなんとか辛抱していたが、女主人が住まいの掃除にいつまで経つてもけりをつけないので、もう一度、今度はいくらか軍隊風に扉を叩き、仲間ともども、中へ入れて欲しい、と要求する。

と、またさつきの声で返事。

「落ちつきな。聞こえてるよ。お客様の前に出られるように、頭巾をかぶる暇くらいおくれ。そのあいだに、鍋がちゃんとぐつぐつしているように、外の火を搔き立てときな。それからね、あたしの煮物をつまみぐいするんじやないよ」。

騎士ローラントの厨房でおつまはつちゃん鍋視きの常習犯だったザルロンは、生得の本能から火の面倒を見るという仕事をとつぐに引き受けっていたが、前もつて鍋の中身を偵察、ある発見をしており、これはどうもあまり気持ちのよいものではなかつた。というのは、鍋蓋を取つて料理肉叉を底まで突つ込んでみると、上がつてきたのは棘^{ハサ}だけの針風。こいつの姿に彼の食欲は減退、胃袋はがつがつしていた渴望をすべて放棄したほど。しかし彼はこの料理



吟味のことは連れたちに全然気づかせなかつた。針鼠の煮込みがうまい吸い物という触れ込みで食膳に出されても、仲間の食欲を損ないたくなかつたからである。アマリンは疲労のあまりうとうとまどろんでいたが、好い加減寝足りたのに、洞窟住まいのご婦人はまだ身仕舞いを終えぬ。で、目を覚ました彼は、騒ぎ立てているアンディオルに加わつたが、こちらは洞穴の所有者との、入れろ、まだ入れない、の烈しいやりとりのあげくもう降参。やつとのことでなにもかもきちんとしたところで、ご婦人、ほい、しまつた、鍵をどこやらに置き忘れた、などとぬかす。そのうえ慌てふためいたので、ランプをひとつくりかえし、お蔭でまたしても鍵がどこだか分からなくなる。腹ペこの旅人たちば、のつけに言われた辛抱の稽古を



じつくりやるはめになつた。長いこと経つてから、やつとさ鍵がみつかり、扉が開かれた。けれどもまたしても、よその克己心を試す待つたが入る。扉が半ば開いたとたん、火のようにぎらぎら目を光らせた大きな黒猫が飛び出した。すると即座にこの家のおつかあ、扉をぴしやり、門かんぬきをがちやり、あたしんちを騒がせ、あたしの可愛い飼猫を殺しちまうような目に遭わせるなんて、ま、なんて荒くれ者の客だろう、といがむは、なじるは。「野郎ども、うちの猫を捕まえてきやがれ」と中からどなる。「さもなきや、だれがおまえたちにうちの闕しきを跨またがせるもんか」。

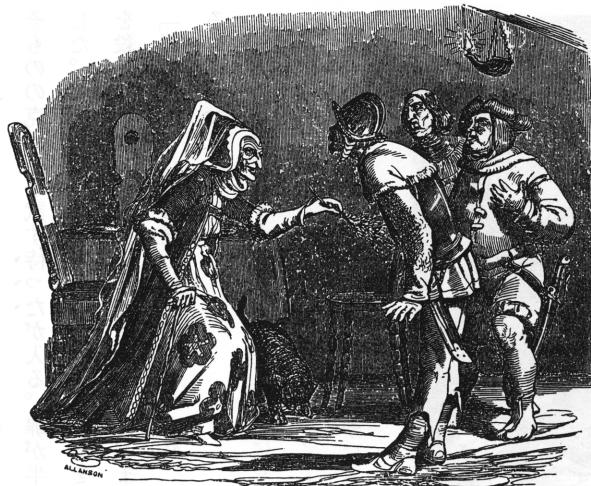
三人の兵士は、どうしたものかと思案にくれてお互に顔を見合させた。

「魔女めが」とアンディオルは歯ぎしりしながら呟く。「さんざんおれつちをからかいやがつてからに、今度は文句と脅かしかよ。女ひとりに男三人をばかにさせとくつもりか。ローラント様もご照覧、あの女にそうはさせねえ。扉をぶち破つて、堂々と軍人流にここにお宿の設営をつかまつろうじやねえか」。

アマリンもこれに同調、が、利口なザルロンはこう言つた。

「兄弟、自分たちがやろうつてことをとつくり考えな。そんなちよつかいを出すと、まずいことになるかも知れねえぜ。おれにはどうも妙な虫の知らせがするんだ。辛抱が尽きてなけりや、ここのおみがやれと言いつけたことを、きちんとやつてのけようぜ。そうりや、おれたちをからかおうつていう、あの女の気まぐれもおし

まいになるだろうよ」。語もたら。つやつやめいひ、森のなかで數むと



このしかるべき意見は採択され、総力を挙げてのマルナー狩りが即刻始まった。しかしこやつ、森のなかに逃げ込んでしまった、暗澹たる夜のこととて見つけることはできぬ。その眼は、その輝きがラウラに捧げる不滅の歌を書き下ろしたとき、詩人にとってランプの役割を果たしたというあのペトラルカの愛猫の目の玉のごとく、ざらざらと光っていたのだが、このピレネー産猫、女主人同様の悪戯つ気も持ち合っていた。だが、このピレネー産猫、女主人同様の悪戯つ気も持ち合っていたと見え、わざと瞑つたか、あるいは自分の所在を告げぬよう、そっぽに向けていたかしららしい。しかし老猾なザルロンはこやつに近づくすべは先刻ご承知。彼は猫族の艶めかしい囁語を真に迫つてニヤウニヤウやるのに通じていた。そこで、とある櫻の樹のうえに逃げ登つていたこの森の隠遁修行者は、その声色に騙された。なにせ、人里離れた侘住まいでは、飼い主と、それから時々一緒に駆け回る何匹かの穴藏の小鼠以外にはつきあいの嬉しみがなかつたものだから、愉快な女友だちが近くにいる、と思い込み、跡を慕つて樹から降り、小夜曲の不協和音の齊唱にとりかかつた。これぞあの、熟睡していた人たちの安眠を破り、溲瓶の中身を窓下の煩わしい恋愛詩人めがけてぶちまけるよう仕向ける代物。

ワオワオ猫がその啼き声で居場所をばらしてしまふと、待ち伏せしていた従士は手ぐすねひいて、猫に忍び寄るとぱつと捉らえ、とつかまつた脱走兵を勝鬨を挙げて岩窟の入口へ運ぶ。扉はもう閉まつて

このしかるべき意見は採択され、総力を挙げてのマルナー狩りが即刻始まった。⁽⁵⁾しかしこやつ、森のなかに逃げ込んでしまった、暗澹たる夜のこととて見つけることはできぬ。その眼は、その輝きがラウラに捧げる不滅の歌を書き下ろしたとき、詩人にとってランプの役割を果たしたといいうあのペトラルカの愛猫の目の玉のごとく、ざらざらと光つ

いない。三人の従士たちは大喜びで、逃げていたこの家の守り神を連行して中に入った。女主人と昵懇になろう、とわくわくして。けれどもぎよつとしてあとずさる。彼らが目にしたのは生ける骸骨、乾涸らびた化けそうな齢の婆さん、まとっているのは長い部屋着、一本の寄生木を手にしていて、ようこそおいで、と言いながら、なにやらおごそかな様子で入つて来た連中にそれを触れる。それから用意のできた食卓に座るようにと促した。並べられているのは、ミルクを入れてこしらえた料理、焼き栗、新鮮な果物といった簡素な食事。勧められるまでもない。腹がペコペコのお客たちは飢狼のごとく食べ物に飛びつく。そしてまたたく間に皿小鉢を綺麗にからっぽにしたので、食いしん坊の鼠でもその残り物で満腹することはできなかつたろう。ザルロンは、二人の戦友の先を越し、大至急で胃袋を満足させた。まだこれからもう一品、針鼠の煮込みがお目見えするだろう、そいつは仲間たちだけに好きに食わせよう、と考えたからである。けれどもこの女主人はそれ以上料理は出さなかつた。ザルロンは、おつかあ、この珍味は自分専用に取つといたんだな、と得心。

そのあいだ婆さんは、イスパニア産の毛織物を敷布団にして、せつせと寝床の支度をしていた。けれどもこれでは狭くて窮屈、三人寝るには無理なのだ。眠りたがりのアマリンはそれに気づいて、立ち働いている女主人にそう話しあ三人目の男もお忘れなく、と頼んだ。婆さん、歯のない口を開け、にやにやしながらこう仰せになる。

「いい子ちゃんたち、心配ご無用。三人目の男だって地べたでは眠らせないよ。わしには大きい寝台がある。そこのならわしにもその御仁^{ごじん}にもゆつたりしてゐるわな」。

三人連れはこうした科白^{サリュ}をうまい冗談だと思い、このおつかあどん、寄る年波なのに上々のご機嫌だわい、と喜んで、その妙案にはらを抱えて大笑いした。もつとも利口なザルロンは、このご高齢のご隠居さま、時々へんてこりんな気まぐれを起こすからなあ、と考え、この場合おふざけなのか大真面目なのか、ぐずぐず詮索するのは止しにして、



急に酔つて眠くなつた風をよそおい、なにがなんでもおれはここ、と千鳥足で寝床へ向かい、そこにばつたり、同衾相手がどうこうという女主人とのからかいあいの継続は、戦友たちに一任した。二人の戦士はこの戦略にはすぐ気づかなかつたのだが、そのうち同じことを思いついてお互いを出し抜こうと考え、どちらも相手に譲ろうとはしなかつたものだから、拳骨で決着をつけることになつた。婆さまは、二人の拳闘家がぐるぐる輪を描くのをしばらく静観、一方

三人目 狡猾なザルロンは盛大に鼾いびきをかいた。しかし闘いが白熱、サラセン人の手を免れた闘士たちの黄金色の巻き毛が床に飛び散るという段になると、彼女は寄生木の枝をつかみ、それで二人の競技者に触れた。すると彼らは二本の円柱のようにこんこちに硬直してしまい、指一本動かせなくなつた。さて、婆さまは冷たい痩せ萎

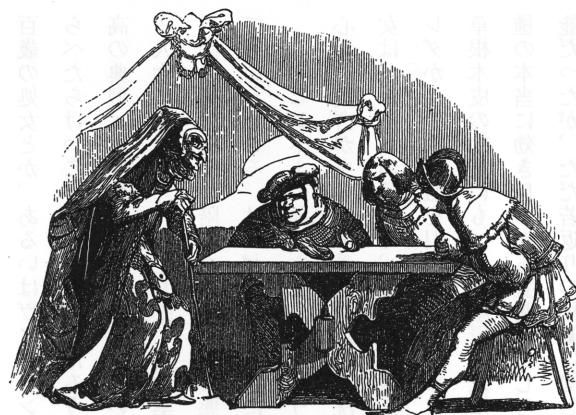
びた死人のような指で彼らのぼつぼと火照る頬を優しく撫でて、こう言つた。

「仲直りしな、子どもたち。閨雲ひづもに焼き餅焼いや、損するばかりだよ。おまえさんがたは皆、あたしと一つ床に入りたいと言える権利も資格もあるさ。この家のしきたりからすりや、だれにも順番が回る。おまえさんがた、あたしを抱いてあつためておくれ。そうすりや、この世におさらばする前にもう一度あたしや若返れるつてもんだ」。

それから彼女は二人の逞しい格闘家の魔法を解き、ぐうすかやつてゐるザルロンを起こせと命じた。が、どんなに揺さぶろうが、脇腹を突つこうが、目を覚ますことができない。もつとも婆さまは、見たところ死んだように眠つてゐるのをぴんしやんさせる手だて心得ていた。彼女があの摩訶不思議な寄生木の枝でちよいと触つたとたん、従士は体を妙な具合にくねらせ始め、寝床のうえで芋虫みたいに七転八倒、ポアトウの疝痛せんつうに責められてらされているよう

に恐ろしく腹が痛いと訴え、女主人に、痛みを楽にする浣腸かなんかしてくだされ、と三拝九拝。けれども婆さまが

すぐさま靈験あらたかな軟膏を手に取り、それをザルロンの臍に塗るように言うと、たちどころに痛みは雲散霧消し



た。

三人の従士は今はもうできればあの櫻の下にもどりたかった。手を変え品を変え自分たちをからかい、慰み物にする強力な女魔法使いにいいようにされているのが、よく分かつたからである。とはいものの、どんな悪ふざけをされたものほんとした顔をしているほかどうにもしようがない。

「子どもたちや、もう遅い。うすら寒い夜が罠栗の実（眠氣）を撒いているわさ。おまえさんたちのだれがあたしの寝室で休むか、籠で決めよう」。

こう言うなり彼女は一束の麻糸の屑を持つてくると、それをちよつぴりつかみ、軽いすかすかの小さい球をこしらえ、三人男にもそうするよう指図した。こちらもぐずぐず言わずに戸惑ふことを聞く。ただし狡いザルロンは自分の球をできるだけ固くぎゅっと丸めた。それから魔女は燃えている木切れを手に取ると、糸の塊全部にそれで火を付けていわく。

「あたしの次に飛んでいつちやうのが、今夜のあたしの臥床のお相手だということにしようね」。

彼女の糸球がまず燃え尽きて灰がふわふわ飛んで行き、そのあとがアンデイオルので、それからアマリンの球の順。ザルロンの灰の塊だけが、球が重くて締まっていたので、テーブルのうえに残つたまま。そこで婆さまは同衾相手を優しく抱きしめ、寝室へと連れ込んだ。彼はといえば、警吏にしょつぴかれて絞首台の梯子を昇る泥棒さながら、髪の毛をおつたたせて慄えながらその後についていく。憐れな男にとつて、

物凄い骸骨と共寝の一夜を明かすのは、まことに酷しい苦闘であつた。ご老体がもし、九・九・八十一回の夏を生き長らえて最晩年になつてもまだ魅力たっぷりで、実の息子がそれと知らずに熱烈な恋に燃えたという、かのニノン・ド・ランクロ(1)みたいな女性だったら、この色恋沙汰ももしかしてまだしも我慢できたかも知れない。けれども時間がその歯で彼女の容貌を食い荒らしてしまつて、人相学に関する諸断編を材料に綴り合わせてこしらえた百歳の処女とか、あるいはヴィットテンベルク版聖書の木版画にあるエンドルの魔女とかの肖像(2)だつて、その醜面(3)にくらべただけつこう美人で通れただろう。母なる自然是、美醜の極限線を女人の肉体で一つにするのがお好き。美の至高の典型は女性だが、醜さの極致(4)といふのも女性である。この両極点が、なるほどまつたく隔たつた時期にだが、同一人物に重なるということは、鼻高美人をいくらかでも謙譲にさせるであろう観察である。アンディオルの女帝(スルダナ)は人間の顔の極限段階にあって、かの悪名高いバシュキール人の二面相をさう遙かに下回つており、ひどさのきわみともいふところ。けれど昔も美しさに關してそうした究極の存在だったかというと、そう簡単には決めつけられない。このピレネーの孤独な住人は、もう何世代も前からここに棲みついていた。その人生行路は、どこぞのご領主の信心深い奥方がキリスト受難週に足を洗つてやるならわしの十二人の老女たちの齡を合わせた半ばにはほひとしい。彼女はドルイド(5)の子孫で、この死に絶えつゝある一族のすべての秘儀秘法をことごとく繼承しており、あの名高いヴェレダ(6)から直系で血を引いていた。ヴェレダは彼女の曾祖母に当たる。(原注2)自然の諸力はすべて彼女の思うがまま、草根本皮の効能にも、日月星辰の及ぼす作用にもよくよく通じており、貴重なチンキ剤の調製に堪能、そのうえある種の本当に効き目のある靈薬をこしらえもした。これはアルトナのシユヴエルの薬が請け合つてはすべて可能だつたが、ただ若返りの秘薬に関しては、彼女、どうしても成功しなかつた。これはアイマール、またはベルマールの侯爵(7)が、現在ヴェネチアで探究模索のあげくやつとのことで調製することができたもの。あるお齢の貴婦人など

はあまりに強く擦り込んだので胎児の状態に退行してしまった、^(原注3) というほどあらたかだ。婆さまは魔法にかけては腕達者。ドルトイドの神秘な寄生木はその手に持たれるとキルケの魔法の杖に変じるのだつたし、連ねた蛇の目玉で貴人の寵や女性の愛を喚び起すすべも少なからず心得ていた。もつとそれは、この強力な護符を身につけている人が色恋気分の増殖に向いていればの話。というのは、このおつかさん自身については、頸の周りに真珠のネックレスのように巻いている九連の蛇の目玉も、我と我が身には一向^(原注4) 驗がなかつたからである。ベルマールの処方が手に入るのならば、このご老体、九連の蛇の眼と魔法の付属品もおまけにして、自分の家庭薬局と喜んで取り替えつこうことだらうが、この素晴らしい配合法はこの時代にはまだ発明されておらず、従つて、人間の例の二つの宿望、長生と不老のうち、彼女が達成できたのは、最初の方だけだつたしだい。特効薬が無いものだから、婆さま、この一番目に関しては代用薬に頼ることにしたが、これとてそつぱかにしたものではない。紡ぎ織りなした秘法の網の真ん中で蜘蛛^(原注5) みたいに辛抱強く待ち伏せして、遍歴のコスモポリタンがやつてくるたび、すかさずぱつととつつかまえて妖術の網に絡め取る。縋張りに足を踏み込む旅人すべてに——この養生法の使用に耐える場合にはだが——臥床を共にするよう強い。そして一夜同衾するたびごとに、彼女は三十歳若返るのだつた。なにしろツエルズスの定理^(原注6) に従い、彼女の乾ききつた肉体は強壯な同衾者が發散する健やかで若々しい精氣をがつがつと吸い込んだからである。そのうえ、毎晩就寝する前に、古い羊皮紙の巻物みたいな肌に針鼠の脂をたっぷり塗つて、生きながらミイラにならぬよう、柔らかにしなやかにするのを、決しておろそかにしたことはない。

考えでも、ことばでも、行いでも、貞潔の捷をいささかも冒すことなく、三人の従士がせんかたなくご所望の儀礼を尽くしたので、老女は九十年もの煩わしい齢をうまうまと厄介払いして、またびんしょんと歩けるようになつた。利口なザルロンは狡く立ち回つてはみたものの、今回のところは仲間たちと同様の運命を免れなかつたが、世にも大

きな災厄だなんでもの、大部分はただの思い込みに過ぎないのであって、ひどい一夜を明かしたところで、至福の一晩より時間が多いたわけじやない、との見解を表明。三日目になつて、活力を取り戻した婆さまが寝床相手たちを放免、ねんごろな挨拶で旅を続けるように勧めると、弁士ザルロンは進み出てこう言つた。

「客に何も持たせずに旅立たせるちゅうのは、お国ぶりではないですな。それにわしら、おまえさまに礼なり饋別なり頂けるだけのことはしたでしようが。おまえさまはわしらをしたたかにからかつて、ちよつぴりの食い物、飲み物のためにうんとこさ苛めた。わしらは、台所の下はした女めみたいに鍋のそばで火をかきたてたでしようが。跳ねだしちまたお気に入りの黒猫くろねこどんを捕まえてあげたでないですか。それに歳としという霜におまえさまの体の骨ほねがたがた震えとるので、わしらの胸であつためてあげたでないですか。おまえさまのために半端はんぱ仕事をしたり、丁重にお仕え申したりした報酬はどんなものになりますんで」。

ドルーデ婆さんは考え込んだ様子。こういう年取つたご隠居さまの常で、根がけちんぽうだから、そうおいそれと物をくれてやりはせぬ。とはいへこの三人の男どもが可愛くなつていたので、要求に応じてやる気になつたとみえる。「銘々あたしのことを思い出してくれるように、あんたがたに何か贈り物ができるかどうか、ひとつ見てみようかね」と言うと、ちょこちよ(2)走りで納戸のあどに入つて行き、いくつもの箱を開けたり閉めたり、長いこと捜し回つて、ティバイの百の門びゃくのもんを管理してゐるかのよう健束けんしょくをがちゃがちゃさせてゐる。随分待たせてから着物の裾に何か隠して姿を現し、賢いザルロンに向かつて訊いた。

「あたしの手の中の物をだれにやるうね」。

「佩劍持ちのアンディオルに」。

彼女は鏗びた一文錢いっもんせん一枚取り出して言う。

にいたときに自分たちの思慮が足りなかつた、と悔やみ始めた。



「さあ、お取り。それから、あたしがつかんでいる物はだれにやればいいか、言つてごらん」。

こんな戴き物にはなはだもつて飽き足りない従士はぶつきらぼうに返事。
「好きな奴が取りやあいい。おれの知つたことか」。

ドルーデが、

「だれが欲しい」と言うと、盾持ちのアマリンが名乗りを擧げる。もらつたのはちいぢやなナップキン。上質の雲扇織りで、綺麗に洗つて火熨斗が掛けてある。ザルロンはじつと我慢して、一番いいのをせしめようとの魂胆だつたが、押領したのは革手袋の片つぽの親指の部分で、仲間たちにげたげたと笑いとばされた。

〔その式〕

こうして三人男は道中を続けることとなり、情の籠もつた贈り物に感謝もせず、儉しい老刀自の気前の良さを褒めたたえもせず、冷やかに別れを告げた。それどころか、しょっちゅう思い知らされたあの寄生木の枝のご威光で婆さまを畏れ憚ることがなかつたら、腹さんざん毒舌をふるつてやりたかつたくらい。野道をしばらく歩いてから、佩剣持のアンディオルがまず、ドルーデの岩窟

「なあ、おめえら、あの魔女が、おれたちをからかう種にしたがらくたを探し集めるのに、あの納戸部屋で箱をいくつも開けたり閉めたりしたのが聞こえたろうが。あいつの箱のなかにやあさだめし豪勢なお宝があつたことだろうぜ。おれたちが利口だつたら、それなしじやあいつ何もできっこないあの魔法の杖を狙つてこっちのものにしてよ、お倉のなかに押し入つて、軍人流儀で獲物を頂いたのになあ。婆さんひとりにいいようにばかにされたりしないでよ。」

不機嫌な従士はこの調子でまだ長々と熱弁をふるい、しめくくりにあの鋤びた銅貨を取り出して、腹立ちまぎれにぽんと投げ捨てた。アマリンも朋輩の例にならい、ナップキンを頭の周りに振り回し、

「何も食うもののない荒野原でこんな布切れが何の役に立つていうんだ。御馳走たっぷりのテーブルにありつけりやあ、涎掛けなんざ無くたつていいやね」と言うと、吹く風のままに任せた。風は近くの茨の茂みにそれを吹き寄せ、茨の茂みは老いさらばえた情人の愛の報奨を尖った刺に引っかけた。一方鼻のよく利くザルロンは、軽んじられた餞別の秘めた力を喰ぎつけていたので、世の常の成り行きとはいひながら、中身の吟味もせずに、物をただ上辺だけで判断する郎党仲間の分別不足を非難したが、所詮馬の耳に念佛。とはいえ逆に、そんなつまらない親指サックなんて捨ててしまえ、と言われても承知せず、却つてこの話をきつかけにあれこれとそれを試してみた。まず右手の親指にかぶせたが、効果なし。次に左手の親指に取り替えてみる。こうして三人連れはまだしばらくぶらぶら歩いて行つた。不意にアマリンが立ち止まり、

「ザルロンの奴はいつたいどこだ」と訝つた。アンディオルが答える。

「ほつとけ、あの欲張り、おれたちが投げ捨てた物を拾いに行つたんだろう」。

ザルロンはこの問答を耳にして、黙つたままびっくりした。全身に冷たい震えが走り、こらえきれないほどの喜び



でわくわく。なにしろこれで親指サックの秘密の謎解きができたわけ。仲間たちが彼を待つてやろうと足を止めると、こちらはせつせと先へ進み、たっぷり距離が開くと、大きな声でどなつた。
「おおい、ぐうたらども、なんだつてぐずぐずしてるんだあ。どれくらい待たせようつていうんだ」。

従士兩人は、ずっとしろにいるとばかり思つていた仲間の声にびんと耳をそばだて、歩速を倍にしてせわしなく彼の前へと駆け抜けたが、姿が見えるわけではない。これでいよいよこの親指が隐形の術を授けてくれたのが確信できたので、嬉しさはいや増すばかり。こんな具合にしたかに彼は一人をからかったが、連中、大いに頭を悩ましたものの、このからくりの原因がさっぱりつかめぬ。朋輩はどこかの崖から深い谷に転落、頸根っこをおっぺしょつて、その亡靈がおさらばを告げにふわふわとあたりを漂つてゐるのじやないか、と推量、お蔭で非常な恐怖に襲われ、冷や汗がたらたら。

どうとう遊びに飽きたザルロンは再び姿を露わにし、不思議な親指サックの性質をじつと耳を傾ける仲間たちに教えてやり、彼らの知恵の無さを叱つた。兩人は木偶でくさんながら呆然と佇むばかり。驚きから立ち直ると、彼らは無下に扱つたドルーデ婆さんの贈り物を取り返そうと、大急ぎで駆けもどつた。アマリンはもう遠くから茨の藪のてっぺんにナップキンがそよいでいるのを見て、大きく歓呼の声を挙げる。茨



の藪は、東西南北の風がそれを我が物にしようと争い合っていたらしいのに、幼な児への遺産分与分を法に照らして嚴重に保全するおおかたの信託金庫よりも誠実にこの預かり物を守ってくれたのである。あの鋸びた一文銭を草のなかに探し当てるのはもつとずっと難儀だつた。けれども、我欲、金銭欲というやつは、落とし物を捜す持ち主にアルゴス⁽¹⁾の目をあたえ、足を導き、宝が隠されている場所に行き当たらせてくれる占い棒として役立つもの。高くぴょこんと飛びはね、感極まつた大声が挙がつたので、鋸びた銅貨が無事見つかつたことがわかつた。この長い散歩に旅の一行為疲労困憊⁽²⁾、じりじり照りつける日差しを避けようと、野原にぼつんと立つてある樹の木陰に休んだ。なにしろかつという真昼時、腹の虫は空っぽの腸⁽³⁾のなかを十八尺⁽⁴⁾にわたつてのさばかり、結腸（不機嫌な腸）のなかでもろもろのむしやくしゃを惹き起こしていた。それでも三人の冒險家は上機嫌、胸は楽しい希望ではちきれんばかり。それに二人の仲間はもらつた魔法の贈り物の力をまだ試していなかつたので、それを調べようといろいろ試してみた。アンディオルは手持ちのなげなしの金をかきあつめ、それに例の一文銭を混ぜ、一列に並べて前から、またうしろから、あるいは左手、あるいは右手で積み上げては、上から、また下から、数えはじめてみたものの、もしかすると、と考えたヘック銅貨（縁起銭）の機能は発見できない。アマリンはわきに離れて、ナップキンをお行儀良くボタン穴に結びつけ、こつそりザカリア頌歌（ベネディクトウス）⁽⁵⁾を唱え、それから大きな食物門（口）の二枚の大戸（唇）をぱっくり開けて、鳩の丸焙⁽⁶⁾きが口のなかに飛び込んでくれれば、とひたすら念願。けれどもこのやりか

たは当てずつぱうもいいところだった。そこで彼はまた仲間のところへもどり、偶然が事を解決してくれるのを待つことにした。激しい飢餓感はなるほど上機嫌を増してくれたわけではなかつたが、魂の弾力というやつはひとたびびんとなると、ささいな天候の変化ではすぐに弛みはしない。アマリンがもどつてくると、ザルロンは陽気なしぐさで彼の手からナプキンを取り上げ、それを樹の下の芝草のうえに拡げて、こう叫んだ。

「ああさ皆の衆、寄つてきな。お膳の支度ができたぜ。さて、ナプキンのお力でおれたちに、ばかばかに茹であげた燻製豚腿肉^{燻製豚腿肉}と、それから白パンをたっぷりお恵み戴けますように」。

こう言い終わつたとたん、布のうえに樹からラスペルパン⁽¹⁾が雨霰⁽²⁾と落ちてきて、同時に茹でた燻製豚腿肉の入つたぼつてりと膨らんだ深鉢のかつこうの時代物のマヨルカ焼き⁽³⁾が出現した。驚きと食欲が腹ペこの一同の顔に奇妙きてれつなコントラストを描いたが、すぐさま胃袋の本能がびっくりを制覇、浮きうき、がつがつと頸を活動させたので、搗碎機の立てる律動的な音を聞いているんじやないか、と思えるほど。肉の最後の切れ端が骨から削り取られるまで、食事のあいだだれひとりとして一言も口をきかなかつた。

空腹が十二分に満たされると、そのやかましい双子の兄弟、つまり喉の渴きが文句を言いだした。とりわけ食通のザルロンが、あの燻製豚腿肉はどうも塩辛すぎたと感想を述べたので。まず癪持のアンディオルが、彼の言い種によれば中途半端な食事に不服を表明していわく。

「このおれさまは酒抜きでめしを食つたことはない。こういうめしじやあんまりありがたいとも言えないで」。そしてこのナプキンの物足りない効能について、滔々⁽⁴⁾と雄弁をふるうは、ふるうは。性格からして、けなされているのは我慢できないアマリンはこの批判に氣を悪くし、ナプキンの四隅をつまみ、鉢⁽⁵⁾とそれを片付けようとした。しかし



「おめえが今後おれの客になりてえなら、うちのお膳が出してくれるもので我慢して、おめえの飲みたがりの脾臓のためにやあ、たっぷり湧きだす泉の水でも探しにいきな。

「兄弟」と彼は高慢ちきなあら探し屋に向かって言つた。
「うめえことをぬかしたな」と利口者のザルロンが応じて、「その別のおあつらえつてえのをやつてみようや」と言うなり、もう一度ナップキンをひつたり、草地の左手にそれを拡げ、ナップキンの奉仕の靈がそのうえに最上のマルヴォアジー葡萄酒⁽⁷⁾を満たした酒瓶を数限りなく出してくれるよう、願い事をした。たちまちマヨルカ焼きが出現。見たところ前の食器と揃いのようだが、両把手つきの壺で芳醇⁽⁸⁾無類のマルヴォアジーがみなみと入つている。

甘い美酒をきこしめしてご機嫌の従士たちは、こうとなつては皇帝カールの御位とだつて自分たちの境涯を取り替

えはしなかつたろう。酒は浮世のあらゆる憂さをいつぺんに押し流し、彼らが高脚杯たかつまきの代わりに用いている鉄兜のなかで真珠のような泡を立てた。酷評家のアンディオルですらナブキンの力に素直に頭を下げ、持ち主が売つてくれようというなら、まだ効能はとんと分からぬながら、例の鑄びた一文銭と即刻交換したことだろう。もつともこの銅貨、彼にはますます値打ち物に思われてきた。で、ちゃんとあるかどうか確かめようと、しょつちゅう触つてみるのだった。引っ張りだして刻印を調べようとしたが、磨滅してしまつていささかの痕跡もない。そこで裏を見ようとひっくりかえす。これが銅貨から授かり物を引き出すどんどんびしやりの方法だったわけ。文様も字も見つからなかつたから、またしまいこもうとしたとき、この縁起銭の下に同じ大きさ、同じ厚みの金貨を一枚発見。事の具合を確かめようとこつそり何度も実験を繰り返すと、演習は上首尾。あの昔のシュラクサイの哲学者(9)が、入浴中に黄金の水裁きのやりかたを見つけ出し、嬉しさのあまり無我夢中になり、素つ裸なのも恥じらわず、町中「みつけたぞ」と叫びながらそれで歩いたときのあの有頂天の喜びようで、佩劍持ちのアンディオルは座つていた芝草から立ち上がり、腰を屈めて樹の周りをびょんびょこ跳ね回り、大口開けて、

「おおい、きさまら、やつたぞ、やつたぞ」とどなりたて、仲間たちに鍊金術の手順を打ち明け、歓喜の熱狂に浮かされて言いだしたのが、すぐさまあの親切なドルーデ婆さんを捜し当てに行こう。婆さん、ちょっととこちとらをからかつたが、その埋め合わせにこんなおおばん振る舞いをしてくれた、ひとつ足元にひれ伏して礼を言わなくつちや、という提案。同じく我也われもと心弾んだ一同は、急いで持ち物をかきあつめ、元気一杯元来た道をせつせと取つて返した。けれども、一所懸命ピレニー中を歩き回つたものの、彼らの目が晦(10)まされたのか、酒気のせいで道を間違えたのか、それともドルーデ婆さんがわざと身を隠したのか、いずれにせよあの洞窟は見当たらなかつた。彼らがどうも迷つたようだと気づく前に、いつかあの不思議な山脈から出てしまつていて、レオン王国へ向かう街道をたどつて

いたしだい。

鳩首談合したあげく、この行程で進軍しよう、鼻の向く方に進もうと決定。従士たちの幸運のクローバーは、彼らがこれ以上望みようもない品々を手に入れたことをよく承知していた。これらの品物はこの世で最大の幸せをえてくれるとは言えないまでも、めいめいの望みを達成するだけの基盤を含んでいたのだ。革の親指サツクは、みかけはぱつとしないけれども、ギューゲスがかつて持っていたあの有名な指環⁽¹⁾の特性はすべて具えているし、鑄びた一枚銭はフォルトウナートウスの財布同様ありがたく役に立つ。そしてナプキンにはその本来の効能のほかに、聖者レミギウス⁽²⁾の名高い奇跡の瓶の祝福も籠められていた。この素晴らしい贈り物の効能を代わるがわる楽しむのに必要な場合を確保するため、三人の朋輩は、決して別れ別れにならない、各自の品物は共同で使うこと、という取り決めを交わした。そのうちこの連中はそれぞれ、持ち物の身震⁽³⁾はよくあることだから、自分の道具の性能が一番優れている、と自慢を始めた。で、とうとう賢いザルロンが、彼の親指サツクが他の魔法の錢別の完全性をすべて一身に集めている、と証明してみせてけりをつけた。いわく。

「とびきり贅沢な台所も食料庫もおれには出入りが自由勝手。王様と一つ皿から飯を喰う、という部屋の蠅の特権がふるえるわけだ。防ぎようがねえからの。大福長者の金櫃を空っぽにすることも、インド渡來の宝物をぼっぼに入れるんだつても、思うがままさね。そこへ行くのを面倒がらなきやあな」。

こんなおしゃべりをしているうちに、一行はアストルガに到着。ここにはスプラルビア国王ガルシアス⁽⁴⁾が、美貌と同様、そのはすっぱな点でも評判のアラゴンの王女ウルラカ⁽⁵⁾と結婚してから、宮廷をかまえていた。宮廷は豪奢を極めていて、お妃はその居城の生きた見本帳のようなもの。ご婦人がたが綺羅を尽くそうと憂き身をやつして工夫するものは、彼女を見れば一目瞭然といった態。荒涼としたピレネー山中では、三人の旅人の欲望、煩惱は大いに限られ、



ほどほどのところで済んでおり、ナプキンの出してくれるものに満足していた。涼しい緑陰を見つけると、ナプキンを拡げて喰いほうだいの飲みほうだい。日に六回の食事が最低限で、美味珍味のたぐいはことごとく食膳に供させた。しかし、王都に入ると、彼らの胸になんとも物狂おしい興奮が目を覚まし、ひとつ大いに腕をふるつて、しがない徒士風情から殿様の身分に一躍舞い上がってみよう、と大層もない計画を立てた。不幸なことに彼らは美女ウルラカの姿を目にして、その魅力にとことんまいつてしまつたので、ドルーデの洞窟での珍妙な体験の埋め合わせに、このお姫さまを相手に運試しをつかまつろうとたくさんだしだい。一同、すぐにはお互の下心に気づかなかつたが、分かつてみると激しい嫉妬が胸に生まれて居ても立つてもいられぬ。一致団結の契りはあえなく潰え、めぐりあわせがよくなつたこの連中、一つ屋根の下に住んでいるのがそもそもおもしろくなえ、ということにあいなつた。なにしろ、仲良くやろうやという精神は、お互いが是非必要なところから生まれるものだからね。そこで同盟は突然解消、おれの物はおまえの物、おまえの物はおれの物、の交わりを結んでいた三人はばらばらになつてしまつた。ただひとつお互いに誓つたのは、秘密を人に漏らさぬということだけ。

アンディオルは競争相手を出し抜こうと、早速携帯用貨幣鑄造器を稼働させはじめ、ぽつねんと部屋に閉じこもつて、財布が金貨で一杯になるまで、せつせと銅貨をひっくりかえす。しこたま溜まると、堂々たる騎士のいでたちをととのえて宮廷に姿をあらわし、家臣として仕官すると、すぐにその華美贅沢ぶりでアストルガの全住民の目を引きつけた。知りたがりやたちは、氏素性の詮索にかかつたが、彼はこの点について子細ありげな沈黙を守り抜き、知つたかぶりどもに好きなように当て推量させておく。もつとも、カール

大帝の庶出の息子ではないかとする噂には別に異を唱えない。名乗つていわく、落とし胤ヒルデリヒ、と。炯眼な王妃は、この衛星が自分の玄妙な蠱惑の渦に巻き込まれて軌道を描き始めたのを発見して満悦し、労を惜しまずせつせと魅力を彼に及ぼした。そこで、恋の道の雅びな分野にはうぶで物知らずだったアンディオル君、靈氣の流れにさらわれて、ふわふわするシャボン玉さながら、なすすべ知らず消えがてに漂う。美女ウルラカの媚態というのは、ねつから神性から出たのでもなく、それかといつて仕留めた男の心臓を虚栄の糸にすらりと結んで頸飾りにしてやろうという思い上がりでもない。ひとえにこのご婦人が見て値打ちがありそうと思うきらびやかな装飾を蒐集しようがためである。親衛騎士バラディンにしてやつた連中を筆り尽くす我欲、そうしてから嗤い者にする意地悪い満足、これが彼女の陰険な策謀にもつぱらかかわっている。玉座に座っているくせに、人間にとつて価値がある物はすべて是が非でも手に入れようとするのだ。これ以上使うあてがなくともである。ウルラカの寵愛は、いいようにされた競争者たちがつける限りの最高値でないと、下賜戴けない。ぞつこん打ち込んだ愚か者がすつてんにされてしまふと、鼻の先で嗤われて永のお暇いとまを仰せつけられる。歓喜の蜂蜜を苦い後悔で台無しにしてしまう哀れな情熱の犠牲者は、噂によればスプラルビアの王国に数多いとのこと。にもかかわらず、身の破滅になる灯火のまわりを飛び回り、炎のなかで最後を遂げる後先見ずの蛾には事欠かなかつたしだい。

強欲な王妃は、アンディオルがクロイソス張りなのを嗅ぎつけると、早速この男を蜜柑みかんみたいに用いてやろう、ともくろんだ。皮をきれいに剥いたあげく、おいしい中身を賞翫しようというわけ。高貴な家柄うんぬんの噂とその贅沢三昧ぶりのため、宫廷ではすこぶるちやほやされたので、どんなに眼力鋭い者にもこのきらびやかな外被の中身がたかが騎士の郎党と見抜くことはなかつた。ともすれば行儀ががさつになり、前身の兵隊稼業の地が出てしまうことはあるのだが、品の良い作法進退をこんな風に崩して見せるのは、正真正銘独立独歩の人となりを示すもの、一筋



縄ではいかぬ徵ではないか、と却つて宮廷の取り沙汰となる。かくして王妃ご愛顧の取り巻きたちのなかでもうまうまと一頭地を抜くことに成功した彼は、この体面を守るため骨身も出費もさらさら惜しまぬ。連日きらびやかな祝祭、馬上槍試合、輪突きの早駆け、豪勢な饗宴を催すわ、黄金の漁網ですなどりをするわ、⁽¹⁹⁾ といふぐあい。果ては、奢侈で聞こえた皇帝ヘリオガバルスの向こうを張つて、薔薇香水かラヴエンダー精で湖を作らせ、そこで王妃に舟遊びをさせかねなかつたところ。もし彼女が古代ローマ史に通じていたか、あるいは自分の頭でこうした洒落た着想を思いついていたらの話だが。ウルラカは、この寵臣が主人役でおこなつた狩獵の折り、獵場の森全域が、人工洞窟、養魚池、人工の階段滝、噴泉、パロス島産の大理石でこしらえた温浴場、宮殿、四阿、柱廊を数々しつらえた遊園に変ずるのが見たい、との御意を表明。するともう次の日には数千もの人数が、この壮大な計画を実現し、できれば、王妃が思い描いたよりも更に麗しいものにしようと、懸命に働きだしたものである。こんな事態が長く統けば、王国がそつくり改造されてしまつたことだろう。なにせ王妃ときたら、山があれば、平地にしてたかれ、農夫が耕している畑地では、ここで釣りがしたいもの、ゴンドラが浮かんでいるところでは、回転木馬に乗りたい、とねだる始末。例の銅貨は金貨をせつせと生み、創意工夫の才に富む奥方はそいつをせつせと遣い捨てるというわけ。彼女がひたすら励むのは、この強情張りの浪費家をとことん参らせ

て、どんぞこに追い落とし、厄介払いをしてやろう、ということに他ならぬ。

アンディオルが宫廷でかくも華々しく活躍しているのに、不精者のアマリンは秘蔵のナップキンのお蔭で肥える一方だつたが、やがて食膳の美味珍味も嫉妬ねね妬みに損なわれるようになつた。彼思うに、おれさまだつて、あの高慢な放蕩者のアンディオルとまつたく同様、騎士ローラントにお仕えしていいた従士じやないか。それによ、おれだつてドリードおつかあを抱つこしてあつためてやつたんじやないか。それなのにあの婆さん、贈り物を分けるのにおつそろしく依怙よこひ負ふきをしやがつた。やつこさんは丸儲け、おれはからつけつ、と来てやら。おれは要りもしねえものをもらつてすつかんぴん暮らし、肌着にもさしつかえるわ、財布にや鑑錢やびせん一文もありやしねえ。野郎はどこぞの王子みてえな贅沢をして、宫廷で綺羅を飾り、美形のウルラカの大のお気に入りだて——。むしやくしゃしたアマリンはナップキンを畳むと、ポケットにつつこみ、市の立つ広場にぶらつきにでかけた。すると折りも折り、王の大膳職が公衆の面前でしたたかに笞打ちぢめたれているところ。この御仁、召し上がり物の調理が下手糞とがだつた笞とがでいたく主君の不興をこうむつたのである。アマリンはこの顛末てんまうを知ると、ふと頭にひらめくものがあり、心中こう考えた。台所での手落ちがこうも手厳しく懲らしめられる土地柄なら、台所で手柄を立てればすこぶるお褒めにあずかるに違いない、と。で、そのまま宫廷の厨房に直行、仕事口を探している旅修行の料理人でござい、と触れ込み、なんなりとご所望の品を手並みの見本として一時間でご調進いたします、と請け合つた。

大膳所だいぜんどころはアストルガの宫廷では当然ながら最も枢要すうような部門のひとつと見なされていた。これこそ国家の禍福にまず第一に影響する、というのである。というのは、君公とその大臣たちのご機嫌の好し悪しは、大部分胃袋の消化能力の良し悪ししだいだし、この消化能力が厨房の糜粥ひじょ⁽²⁾製造戦せいぞうせん如何により、促進されもし阻害されもするのは、周知の事実。さてまた、諸王のなかで最も賢明な王おうが——多分自分自身の体験からだと思われるが——その箴言しんげんで教え



を垂れているように、震怒している王よりも猛り狂う獅子の方がまだしも怖くないとやら。そこで、大膳職の選定は大臣などを選ぶよりもずっと慎重に運ぶべし、とは極めて理の当然なる原則である。アマリンは見掛けたところ毛頭お勧めの人物ではない。なにしろ風体容貌ときたら浮浪人よろしくのていたらくだったでの。そこで賄い人拝命者の一員に採用してもらうために、能弁——これすなわち法螺吹きの才だが——の限りを尽くさざるをえなかつたが、結局自分の腕を保証する臆面のない自信満々の態度が、賄い頭の心を動かし、それではコション・ファルシ・アン・オウ・グウ(22)を試しにこしらえてみろ、ということになつた。これはこのうえなく経験を積んだ板前でもしばしば調理に失敗するやつ。必要な材料を請求しろ、と言われたアマリンは、素材選びで大変な物知らずぶりをあらわにしたので、並いする料理方かた一同堪こらえきれずに大笑い。こちらはこういう目に遭つても慌てず騒がず、離れた厨房に閉じ籠もつて扉の掛け金を下ろすと、目くらましに豪勢な火を起こす一方、こつそり持參のナップキンを広げ、極上のできの試供品を出して欲しいと祈つた。たちどころにいつもの古いマヨルカ焼きの皿に入った涎の垂れそうな料理が出現。これを銀の皿に手際よく盛りつけると、どうかお試しを、とお毒味役頭の手に渡す。お毒味役頭は、出来損ないの食い物で口腔の繊細な諸器官を損なわぬよう、びくびくものでちょっとびり舌に載せたもの。けれども仰天し

たことにこのファルシがなんとも絶妙なのだ。そこで王様の食膳に供するにふさわしいと承認。王は折しもご機嫌斜めであり食欲がなかつたのだが、このすてきな詰め物料理の放つ芳香が漂つて来たとたん、額はさつと晴れやかになり、その水平線は上天気を約束。この料理を夢中で味わい、次から次へと皿を空にし、ふと奥方への気まぐれな思いやりに駆られて、残りを若干あれに遣わすように、とならなかつたら、乳呑み豚を一匹そつくり平らげていたことだろう。御前様のもろもろの動物精氣は結構な食事のお蔭で清爽かつ活き活きとよみがえり、食後は龍顔極めて麗しく、畏くも大臣とともに仕事をあそばされ、長いこと繰延べにしていた厄介な懸案事項に、おんみずから言いだしてとりかかつたほど。こうしたなんともありがたい変革をもたらした素晴らしい主輪の存在が忘れられるわけはない。技量に長けたアマリンは豪奢な衣装を着せられ、厨房から玉座の前へ召しだされ、その腕前を長いこと褒めそやされたあと、傭兵隊隊長の位階で首席大膳職に任じられた。

僅かな間に彼の名声は最高峰に登りつめた。始末屋のツォップフと僕約家のヒルマール・クーラス(24)が歴史入門の教科書の中で、放恣この上ない浪費、肉欲の極致の美食の例証として糾明(25)しているあの昔の世界支配者たち、悪評紛々たる古代ローマ版サルダナパルスどもの好物の御馳走——教科書作者の意見では、これこそ帝国の崩壊、ローマの財政の破綻を招いた、ということだが——のすべて、例を挙げれば純金の粒をまぶしたこつてり焼き菓子、孔雀の舌でこしらえた肉饅頭、杜松の実喰い、鶏の脳味噌、山鶴の卵（こういう代物は今日ではもはや旨い物好きの食い気をそそりはしない）、さてまた雄鶏の鷄冠のクリーム煮、鯉の眼肉、似鯉の唇（最後の二つは古伝承によればホラントのさる女伯爵が美食に入れ揚げて伯爵領を蕩尽(26)したとやら）、こんなたぐいはなにもかもこの二代目アピキウスが殿様にさしあげるごくごく日常の惣菜料理に過ぎなかつた。宮中祝賀の日だとか、はたまた彼がやんごとないお口をもつともつと美味しい物で楽しませてやろうと思いつ立つたときには、当時知られていた世界の三つの部分で産する稀少



な珍味を一つの皿に盛り合わせることもしばしば。そしてこうした数々の功勞を嘉され、大膳頭の頭職に、そしてついには宮宰（マヨールドームス）⁽²⁷⁾の地位にすら昇進したのである。

厨房界に出現したかくも輝かしき彗星に王妃の心はいたく悩まされるようになつた。彼女はこれまで背の君のことは一切思うがまま、自分のやりたいほうだいに鼻面取つて引き回してきた。けれども今は図らざる寵臣のせいで権勢も声望も失墜するのでは、と心配でたまらぬ。お人好しのガルシアス王にとつて奥方の奔放な生き方は公然のことだつたが、この人、政略から来ているのか肉体的にそうなのか、お芋の煮えたもご存じないといふ調子で、家庭平和のためやら、生來の不感症のせいやら分からぬが、かつと頭にくることは決してない。そこで狡猾な北の方は、一旦那様が時々なにやらふさぎの虫に襲われるたび、胃袋という搦手から攻めることにしていて、旨い肉の吸い物や刻み肉と野菜の香り煮などの新機軸の考案に気の利いたところを見せたもの。こうした料理がまた王の気分一新に効果をおよぼすこと夥しく、さながら冥府の忘却の川レテ⁽²⁸⁾の水を使つたかのような塩梅^(あんばい)だった。けれどもアマリンのナブキンが惹き起こした厨房革命このかた、王妃の包丁の冴えもまるきりかたなし。あえて何度か宮宰に勝負を挑んでみたものの、ことごとく後れをとる。なにしろアマリンの料理に勝つどころか、彼女の作つた物は毎度味わつてももらえず、食卓から下げられ、給仕人たちや食客連にふるまわれてしまつたのである。ウルラカの創意工夫の才が美味珍羞^(ちんしゅ)をこしらえるのにとんとあぐね果てても、

アマリンの腕はますます上がるばかり。かかる危機的な局面にあたり、王妃は背の君の新しい寵臣を色恋沙汰で自分の味方に引きずり込もうと、相手の心臓部への攻撃を企んだ。ひそかに男を呼び寄せた彼女は魅力の持つ説得の技を尽くして、望みの物を手に入れることにやすやすと成功した。アマリンは、王の次の誕生日を期して、かつて味覚をとろけさせたどんな料理もかないませんはず、と言う触れ込みの自分流儀の一品の調製をご婦人に約束。宮宰が請け合つたこうした好意の報奨が何だったかは言わぬが花。王妃がアマリンの仔牛を使って烟を犁きかえすたびに、彼女の料理は王や王の取り巻きたちの判定でいつも褒められたと申せば充分だろう。

今やアストルガの宮廷でこのうえもなく肝要な役回りを演ずることになった賤の男兩人は、野放図に威張りかえり、成り上がり者の常で意氣揚々とのさばり歩く。運勢のしからしめるところ、どのように袂を分かつたあと、彼らは同じ皿で飯を食い、同じ杯で酒を飲み、麗しのウルラカのお情けを同じく賜るという、まことに近しい間柄となつたのに、かねての約定に従い、互いに赤の他人であるかのようによそい、昔仲間だつたなんて人にはつゆ気取られぬようにあるまつた。ところで一人ながら、あの知恵の回るザルロンがいすこに消えたものやらさっぱり知らぬ。こやつ、大事な親指サックのお蔭でこれまでごく内々に人目を忍んだ暮らしを守り、なるほど、ぱつと派手にとはいかなけれども、望みはすべて叶えられるという具合で、生活を満喫してきた。麗しのウルラカを見た彼は、戦友たちとまったく同様ぞこん惚れ込んだ。そして望みも目論見もこれまた寸分違うことなし。これを実現するのに回りくどいことはこれっぽっちも必要ないものだから、やんごとなきご愛顧を頂戴するのに、恋敵どもの思いも寄らぬ抜け駆けをとつくなしつかまつっていたのである。喧嘩別れをしたあと、老猾なザルロンは目には見えぬながらふたりの朋輩の身辺にまつわりつき、相も変わらずアマリンの食膳仲間にアンディオルの巾着^{きんちやく}友だちのまま、こちらの御馳走の残肴^{ざんよう}で胃の腑を満たし、あちらの余沢^{よだれ}でこつそり財布を膨らませていた。彼がまず考えついたのは、なにか

こうロマンティックな衣装を身にまとい、計画を実行して美貌の王妃のもとに忍んで逢う瀬を楽しもう、ということ。仮装舞踏会で放牧をいとなんでいるアルカディア⁽¹⁾の羊飼いといった恰好で、薔薇色のシャツに紺青⁽²⁾の繻子⁽³⁾の上着を着込み、全身に香水をふりかけると、呪具⁽⁴⁾のお蔭で人目に触れることなく、王妃がお昼寝をしているとき閨房へと入り込む。

いとも蠱惑⁽⁵⁾的な化粧⁽⁶⁾着姿の眠つてゐる美女を見て煩惱がむらむらと燃え熾⁽⁷⁾った彼は、矢も楯もたまらず王妃の朱唇に火のような接吻⁽⁸⁾をする。チュッという音にとろとろ舟を漕いでいた女官がはつと目を覚ます。そのお役目は、孔雀の羽根の蠅叩きで奥方に爽やかな風を送り、翔⁽⁹⁾の生えた虫たちを追い払うこと。臆面もないキスのせいで同じく熟寝から覚めたお妃は、艶然と羞じらいのしなを作り、わらわの唇に接吻などしたこの部屋におりやるかたはどこのどなたじや、と訊ねた。女官はずつと起きていたかのようによそおい、重ねて扇を動かしながら、お部屋には私どもの他にだれもおりませぬ、ときっぱり。それから、もしや殿下におかせられましてはなにやら良い夢をご覧あそばし、それで思い違いをなされましたのでは、と付け加える。けれど王妃は感触があまりにもまざまざとしていたので、お付きの侍女に外の控えの間の衛兵を問い合わせよう指図する。乙女が言いつけに従つて背凭れなし椅子を立つて行くと、扇がひとりでに揺らめき始め、さやさやと涼風を立て、花の香りと龍涎香の匂いを一杯に漂わせる。この現象に震え上がり驚いた王妃は、寝椅子からぱつと跳ね上がり逃げだそうとしたが、目に見えぬ力にしつかと抑えられ、こんなことばを囁く声を耳にした。

「たぐいなく美しい、死すべき定めの人の子よ、何も恐れるにはおよばぬ。そなたは強大な妖精の王の庇護のもとにあるのじや。その名はデモゴルゴン。そなたの魅力に惹かれ、予は上天の神靈界からこの重苦しい地球の大気圏に降つてまいつた。そなたの麗しさを愛でいつくしもうとな」。

ことばが終わつたとき、例の腰元が復命のため部屋に入つて来たが、すぐさま、お下がり、と言われて追い出される。乙女の陪席はこの内密の会見にはなくともがなと思われたので。

麗しのウルラカは、かような超自然の存在に恋慕されたことにもとよりひとかたならず舞い上がり、このうえもなく洗練された媚態の限りを尽くし、その淫蕩な魅力の絢爛たる光彩で妖精國の支配者を眩惑、大切な征服事業を確實に物にしようとかかった。始めはごくごくしとやかなはにかみだつたのが、だんだんにいとしさ、恋しさが芽生えて、それがこのうえもなく熱い激情に移つていくようになつて演出。初手は目に見えない手が触れてくるのにあらがつてみせたが、それからいかにも遺る瀬ない低い溜め息や心の疼きを告げるうめきが洩れ、ためにこんもりと盛り上がつた胸が、あるいは高くあるいは低く、大きく波うつ。妖しい力を湛えた黒い瞳だけが、秋波を送る対象がつかまらずじまいなので、なすすべもないままだつたが、その代わりいとも愛らしい王妃が駆使した機知はそこぶる強力な効果を發揮、デモゴルゴン殿におさせられては、その神々しい分別を名誉にかけて失わないようにするのに大骨が折れる。相愛のご両人の優しい恋の語らいは刻一刻むづまじいものになつてきたが、お妃がこれだけはと不満を訴えたのは、神靈の領域から来たいといお方が肉体を持たぬ存在だということ。そのくせどうやら精神世界より物質世界のほうにずっと重きをお置きあそばしておられるようなのに――。

「御空みぞをしろしめす偉大な君主さま」と彼女。「そもそもじさまは死すべき定めの人の子の体の魅力のとりこになられた、とわらわに仰せになりませんでしたかしら。でもそれならわらわの心とそもそもじさまを結び付けるものはなんだとおっしゃいます。感覺抜きの愛などわらわにはよしなきものとしか思えませぬ」。

天空の王もこれには返すことばがなかつた。なにしろプラトン流の愛こそ元來天界に属するもの、そこで今こそこの定説を標榜ひようぼうして恋の戯れから身を引く絶好の機会だつたのだが、ザルロンはプラトンにもその教えにもとんと不

とりで、その容貌には天才のひらめきも繊細な精神も窺えないではないか。アルカディアの羊飼い⁽³⁾がいの装束を一着におよんだ自称妖精の君公は、どんびしやり、ヴァン・ダイクの絵の構図にあるフラン⁽³⁾の百姓そつくり。王妃はこの珍妙な代物を見てあっけにとられたのをできるだけ押し隠し、誇り高い空気の精が、顕在化して欲しいとうるさくねだられたので、彼女の官能にちよいと水を差すつもりだったのだろう、いずれまた出現するときにはきっとアドニスのような風采になるだろう、とその場は考えて心慰めたわけ。



案内。そこでまるきり別の方に話を持つて行く。

「のう、美しき姫君よ。予には肉体を具え、人間の姿となつてそなたの前に立ち顯れることも思いのままなのだ。なれどかのように身を落とすのは、予の尊厳にかかるのでな」。

それでも麗しのウルラカがそういう犠牲を是非ともとせがみつけたので、ほの字にれの字の妖精王はご婦人の要求をしりぞけることができなくなつた。で、うわべは不承不承といった態で同意。王妃は想像力にまかせて、絶世の美男子に会えるもの、とわくわくしながら出現を待ち受ける。けれども実物と理想の対照はなんたることか。現れいでたのは、まさに平平凡凡、ごくありきたりのご面相、そんじよそちらの人間のひ

〔その参〕

かくなるしだい、初顔合わせはまあ大体のところでは両者ともまず満足で終わり、またの逢う瀬の約束がそれから何度も交わされた。抜け目ないザルロンはおさおさ怠りなくこれを活用、触れなば落ちん風情の尻軽女をひしと抱き締めて、あのドルーデの洞窟でのアヴァンチュールの埋め合わせを十二分に済ませた。もつともしかすると、隠形の能力が無い方がいつそもつと幸せだったかも知れない。姿を見せぬままザルロンは影のようにご婦人にくついていたが、そうなると恋人の身としてはまことにおもしろくない発見をいろいろせざるを得ない。博愛衆におよぼすウルラカが、妖精の支配者へと同様のご寵愛の徴を、料理人と近習きんじゅにも惜しみなく注ぎかけるのを目の当たりにする。自分自身とまったく変わることのない信任をかたじけなくしている以前の天幕仲間たちとのこうした宿命的な衝突に、彼の胸にはきりきりと責め苛む嫉妬のほむらが燃え上がった。恋敵どもに取つて代わる手段を模索していた彼は、偶然とんちきのアマリンに恨みを晴らす機会をみつけた。

王妃が背の君と宮廷人一同を饗應する宴会の折り、蓋を被せた深皿がひとつ運ばれてきた。この御馳走のためにガルシアス王は旺盛な食欲を大事に残しておいたのである。この料理は例のナプキンが魔法で調達してくれたのではあつたが、王妃ご謹製ということになつてゐる品であり、大膳頭が、妃殿下の包丁の刃えはこれにかけてはやつがれの腕など遙かに凌いでおられる、我が名声を台無しにしないよう、いつもの食膳分担は差し控えました、と高らかに宣言したからで。このお追従ついとう、王妃の耳をきわめて快く擗くつきつたので、彼女はそのお返しにこのうえもなく愛情の籠もつた意味深長な眼差しを相手に向けたが、姿を消して傍で様子を窺つていたザルロンはこの目つきに断腸の思い。むしゃくしゃして、こうつぶやく。

「よおし、おまえらのどいつにもこれっぽっちも食わしやしねえぞ」。



給仕頭がその皿を持ち上げて据え、鐘形の蓋を取り去ると、なみいる従僕たちが皆仰天したことに、中に安置されていた珍味佳肴はどこへやら、深皿はすっからかんの空っぽ。召使のあいだにひそひそぶつぶつざわめきが起こり、給仕頭は震え上がってナイフを床に落とし、お毒味役に注進。こちらはお毒味役頭のもとに駆けつけ、ヨブの報らせ（凶報）⁽¹⁾を伝えれば、受けた方は早速長官のお耳に言上。これを聞いた宮宰は威儀をつくろつて席を立ち、同じく王妃の耳にこの椿事を囁く。王妃はこの話に死人のように蒼白になり、気付の水を、と喘ぐ。

一方王はがつがつしながら、憧れの御馳走を運んでくるはずの酌人の到来を今か今かと待ちわび、右手を見たり左手を見たり、こつちへくるはずの皿をみやつたりしていた。けれども、従僕たちが周章狼狽、だれもかれも慌てふためいて走り回っているのに気づいたので、これはいかなることじや、と訊ねる。勇氣をふるいおこした王妃が悲嘆のみぶりで、思いがけないできごとが生じまして、手作りのお料理を差し上げることができなくなりました、と打ち明けた。この不快な通告に空きつ腹の王は、察するに余りあることながら、心底から赫怒、不機嫌に椅子を押し退けると御座所に引き上げる。このあわただしいご退出に一同恐懼して道を開ける。王妃も食堂にぐずぐずしておらず、

自室におもむき、そこで哀れなアマリンを責め折檻するつもり。
彼女はすぐさま宮宰を御前に伺候させた。食べ物の蒸発、そのため招いた王の不興、に恐れおののいて、まだ平静を取り戻していなかつた宮宰がうろたえきつて、いきりたつ奥方の足元にいじいじしおひれ伏すと、こちらは語氣も鋭く、こう口火を切つたもの。



「恩知らずの裏切り者。旦那様のお怒りをその妻に驅り立て、
宫廷の有象無象のあざ笑いにさらすような所業をあえてする
とは、仮にも王妃であるこの身の寵遇をおろそかに思つてい
やるな。あのようにいとも貴い価値を取らせたのに、王様の
ご食膳にあんなどくまらぬ料理をお供えするという些々た
る手柄をわらわに奢むとは、そちの名誉欲はそれほど際限も
ないのかえ。わらわの頼みでいやがうえにも素晴らしい一品
を魔法で調製するというそちの約束を後悔して、わらわが折
も折、それで賞賛と喝采を博そうとしたときに、消し去つて
のけるとはな。すぐさまそちの技の秘密をわらわに打ち明け
るのじや。そもそもなければ火刑の薪の山のうえで妖術を使つた
報いを待つがよからう。明日白しら明けにそこでゆつくり炙
つてくれようぞ」。

こんな風に手厳しくきめつけられて、臆病な抜け作は心臓

がぎゅつと縮みあがり、妃の復讐を逃れるには、おのれの料理技術の秘訣をありていに白状するよりほかしようがありまい、と観念。で、もともと舌長な性分のこととて、ひとたび喋りだすと、あのとろけるような旨煮ラグーを妬みのあまり消してしまったのだ、と激昂している奥方の疑念を晴らしたい一心で、ピレネー山中での奇妙きてれつな一件も、ドルーデ婆さんの餓別のこともすべて隠さぬ。この真つ正直な打ち明け話のお蔭で、かねがね知りたくて堪らなかつたご寵愛の三人に関する詳細な情報をいつぺんに手に入れた王妃は、すぐさまこの連中の魔法の秘具をせしめてやろうという気になつた。分別のない饒舌家がなにもかも語り尽くし、これで充分に弁解ができたわいと独り合点したところで、彼女はさげすんだ口調でこう言つてのけた。

「この情けない阿呆めが。そちはさようにくだらぬ嘘八百で命が助かり、わらわを欺けると思つてゐるのか。そちのナブキンとやらの不思議を見せてみよ。さもなければわらわの仕返しは恐ろしいぞよ」。

アマリンはこの否応なしの言いつけに、それは当然とばかりいそいそと従つた。ナブキンを取り出すと拡げ、どんな物をお出ししようか、と王妃に訊く。こちらは、新鮮な殻に入つたままの熟した肉豆蔻ナツメグ（ナツメグ）の実を、と所望。アマリンがナブキンの奉仕の盡に指図すると、例のマヨルカ焼きの器が出現、王妃は、アマリンが跪いてうやうやしく差し出す緑の枝に生つてゐる殻つきの熟した肉豆蔻の実を見てびっくり。けれども彼女はそれに手を伸べる代わりに魔法のナブキンをぐいとつかみ、開いていた櫃に放りこむなりせわしく錠を下ろしてしまつ。一杯喰わされた富宰は、現世の至福が奪い去られるのを目の当たりにしたので、氣を失つて床にばつたりくずおれる。一方悪賢い盜人女は甲高い悲鳴をあげ、従者たちが入つて来ると、こう言つたものである。

「この男は癲癇てんかん持ちじや。手当してつかわしなさい。けれど、再びわらわを驚かせることのないよう、一度とこの部屋へ入らせてはなりません」。

あの利口なザルロンがいつもは目から鼻へ抜けるくせに、今回仲間に底意地の悪いいたずらをやらかしたのはなんとも先見の明のないことだった。しくじりやがつてざまあ見ろ、とほくそえんだ彼は、賢い三民族がその有用性のゆえにごく簡潔明瞭に三語で表現したあの黄金律をさらりと忘れて、さらつた御馳走をべろりと平らげてしまつたところ、むかむか吐き気がして胃が張つてきた。(風注1)隠形の術を使つている者がいるという目に見える証拠を食堂に出してしまうのでは、と心配になつて外へ飛び出し、庭園を歩き回つて運動、そうやつて胃袋に詰め込んだ物をもつと狭い領域へこなし移していたので、このたびはやつこさん、お妃にくつついてその部屋にもぐりこむことはできなかつたのである。もっとも彼はその前の日、趣向を凝らした遊びをいたしますゆえ、宵においてあそばせ、と女に招かれており、これには怠りなく参上したしたい。王妃はみなみなならぬご機嫌であるばかりでなく、典雅の三女神の一柱さながら愛嬌満々魅惑たっぷりにふるまつたものだから、デモゴルゴン君、甘い官能の陶酔にくくななどろけてしまう。恍惚としている彼に、するがしこい情人は手すから酌をした美酒の杯を差し出し、これを飲んだザルロンはまもなくやすやと好い気分で寝入つてしまつた。それも道理、効能あらたかな眠り薬が盛つてあつたからである。相手が高齧（ひがき）をかきはじめるに、すぐさま奸諂な泥棒女は隠れ道具の親指サックを我が物にし、おつきの従者たちに命じて天空の君主を運び出させ、市の片隅のがらんとした街路に、舗石のうえでぐうぐう昏睡しているまま置き去りにする。王妃は嬉しくて嬉しくて一晩まんじりともせず、ひたすら考えめぐらしたのは三つ目の宝を掠め取る手だて。

曙光の最初の輝きがアストルガの王宮の鋸壁（ノイキ）を黃金色に染めるやいなや、この精力的なご婦人は振鈴を鳴らして腰元たちを呼び、こう言いつけた。

「落とし胤ビルデリヒに使者を遣わしなさい。口上はこうじや。朝のおミサに供奉（ぐぶつ）してたもれ、この特別な愛顧は貧しい人々へ充分喜捨（あがな）をすることであなうようになされい、とな」。

このかたじけない通告を受け取つたとき、幸運と麗しのウルラカに甘やかされた寵児はまだふかふかの寝床のうえでごろごろしていたが、それでも従僕たちの手で寝ぼけ半分ながら身なりをととのえ、宫廷に伺候。そこでは、自分の役に取つて代わる名譽を授かつたこの男をお妃付の侍従長が妬ましそうな顔でにらむ。さて今度は、敬虔ながらも豪奢によそおつた行列が、大司教がその司教座参事会員とともに厳かな盛式ミサをいとなむ大聖堂に向かう。民衆はとつくから黒山のように集まつていて、壯麗な祈願行列をばかんと大口開けて見物。麗しのウルラカ、それからそれにも増して、六人の女官たちにたっぷりとした裳裾を捧持されているその衣装は一同の感嘆の的。あつかましい乞丐、蹇者、瞽人、不具者たちが大勢、撞木杖にすがつたり棒義足を頼りにしたりして、華やかな式列を囲み、王妃の行く手をさえぎつて施しを求めるので、アンディオルは右に左にと自分の財布からたっぷり施物をばらまく。こういった徒党のなかで一段しつこさで目立つたのは年取つた一人の盲人で、しゃにむに近づき、哀れっぽい声を張り上げ、どうぞやお恵みを、とせがむ。こやつ、お妃の脇からでなくその行く手にひつきりなしに自分の鍔付き帽を拡げ、施しを戴かせてくださいまし、と言い続けるのだ。アンディオルは時々金貨を投げ込んでやるのだが、盲人がそれを探り当てないうちに、近くにいる手の長いやつがさつと盗んでしまう。そこで爺さんはまたぞろ繰り言の百万遍をおっぱじめるしまつ。王妃はこの氣の毒な老人に心動かされた様子で、扈從のアンディオルから素早く財布をひつたくると、それを盲目の男の手に渡していくわく。

「さ、お取りなさい、お年寄り。この祝福はさる高貴な騎士様がわらわを通じてくださつたもの。騎士様の幸せをお祈りするのですよ」。

アンディオルは自分の出費でおこなわれたこの王妃の気前のよいふるまいにひどくびっくりしたので、すっかり泡を喰つてしまい、財布をつかみ返そうとするかのように片手を突き出した。このいかにもけちくさい動作に王妃の敬

慶な供廻りの面々はどつと爆笑した。そこで彼はいよいよ狼狽、とはいえ、体面を損なうのもひどく憚られたので、王妃に腕を貸して司教座聖堂カチドラルのなかまで導き、ミサの詠唱がすっかり終わるまで心痛ができるかぎり押し隠した。それから一所懸命例の物乞いの搜索にとりかかり、財布に入っていた時代物の記念メダル——彼の言うところによれば滅多にない逸品——を持参したら、莫大な報奨をあたえる、と約束した。しかし、あの物乞いがどこへ行つてしまつたものやらだれにも分からなかつた。財布を手にしたとたんその姿はかき消え、二度と現れなかつた。そもそもこの盲人は目明きで、捜すのなら王妃の居室の控えの間に行くべきだつたのだ。この男、そこで彼女がもどつて来るのを待ち受けていたのだから。なにしろ王妃は、縁起錢を奪うために、自分の宫廷道化をめしいの物乞いに変装させたので、この代理人が忠実に引き渡した財布のなかにそれを見つけて大喜び。

今やこの奸知に長けた女は手練手管で三人の盾持ちの魔法の宝具をことごとく我が物にし済ました。連中は奪われたのにひどくがっかりして呻いたりかきくどいたり、絶望して髪の毛や口髭をかきむしるばかり。女の方は騙し取るのにみごとに成功したので鼻高々で勝ち誇り、不幸な下郎どものことなどもうこれつぱかりも念頭にない。彼女がまづやつてみたのは、魔法の道具が新しい持ち主の手にあってもその不思議な力を發揮するかどうか、という実験。試してみたところ思いのままにうまく行く。ナプキンは注文通り御馳走を提供、銅錢はドゥカーテン金貨を産み、親指サックを嵌めると、姿を見られずに控えの間にたむろする衛兵のあいだを抜けて腰元たちの部屋へと出て行ける。そこで彼女は胸をときめかせながら、これからどんな輝かしい場面を演じてやろうかといろいろ計画を練つた。そのなかで一番気に入つたのは、肉体をえた妖精に変身すること。創意に富んだ彼女ゆえ、哲学者連中の探究精神にすら詳しいことは明らかになつていないのである。彼女の考えは以下の通り。妖精とは、奇跡を惹き起こす神秘な魔術を一つ、または幾つか心得ている女性というだけのこ

と。そのせいで死すべき定めの人の子の運命を超越しているように見えるだけ。こうした神秘の諸力の意図からすれば、わらわは第一級の妖精の仲間になる資格があると心得てもよいのではないか、うんぬん。あと、王妃が欲しいのは只一つ、龍の牽く車か、乗物を運ぶ一対の蝶たち。空を自由に翔び回る道はさしあたりまだ閉ざされていたのでね。でも彼女は、自分が妖精の講習中に受け入れてもらえたなら、こうした特権に不自由することもあるまい、と高をくくつていた。我が物にした宝具のどれかと交換に、そうした軽やかな旅行装備一式を譲ってくれる親切な同輩が簡単にみつかるだろう、と思う。幾夜も耽るのは楽しい空想の戯れ。可愛い坊やたちに忍び寄り、姿を隠したままからかつたり愛撫したり、頭を狂わせ、恋の苦しみで責め苛んでやるのだ。そして美女の代わりに虚ろな影をつかませるか、それとも事と次第では彼らの望みをかなえてとらせようか。さはさりながら、この新米の妖精は、しかるべきアヴァンチュールに踏み切るには、大事な必需品が欠けていることに気づいていた。充分に吟味した妖精の装束がまだ足りない。空飛ぶための翼から優美な靴の踵にいたるまで妖精の盛装の品揃えを夢中で想像、一睡もせずに過ごした一夜が明けた払暁^{ふつきよ}、アストルガの街の仕立屋組合は総力を挙げて仕事に就かされた。あたかも、当地で一流の仮装舞踏会が開かれる予定なのだと、オペラ・セーリアが上演されるのでごく勝手気儘な女優たちの御用をうけたまわることになつたのだ、とでもいうかのごとし。しかし準備万端とのわぬうちにある事が起こり、全スプラルビア王国を震駭させた。ただし最も仰天したのは麗しのウルラカ。

これでひとまず完璧と考えたお妃が、長いこと氣を張り詰めていたせいである夜ようやくまどろみに落ちたとき、突然荒々しい武者の声で起こされた。王の御名^{ド・ブル・ア⁽³⁾}において、という恐ろしいことばで耳があんとする。宿直^{とのい}の土官が、即刻みどもについてこられたい、と宣告したのである。肝を潰した奥方は面喰らうのもいいところ、ことばも思案もろくに出ぬままこの武士と談判を開始した。この男、非番の折りにはなかなかの風采で、ついでに申しておくと、彼



も妖精のご降臨にあづからされる手筈てはずだったのである。最高裁への控訴も却下されると王妃は、これは分が悪い、命令に従わざるを得まい、と観念。

「王様の御旨みじきはわらわには金科玉条。そなたの申す通りにします」。

そう言うなり、夜寒をしのぐため雨避けマントをはおりたので、と長櫈の傍に寄ろうとした。その実、例の親指器具をこつそり取り出し、ぱつと消え失せるつもりだったのである。しかし隊長は厳命を受けていたので、無礼千万にも美しい囚人にこうした些細な便宜も認めなかつた。懇願も涙も心かたくなな軍人にはなんの甲斐もなく、たくましい腕でお妃を捉えると、さつさと部屋から彼女を押し出し、司法当局はただちにこの部屋を押収、封印してしまう。御殿の階下の車寄せには二頭の驃馬らばに担われた輿輿が一台待つていて、悲嘆にくれる王妃はいともしづけない化粧着姿のままそれに載せられた。すると一行は夜の葬列のようにひつそりとしめやかに人けのない街路をいくつも抜けて市門を出、十二哩マイルほど隔たつたところにある、周囲に高く壁をめぐらした辺鄙へんびな修道院に着き、泣き崩れた囚人はここ地下、深さ四十尋の



ぞつとするような小房に閉じ込められたのである。

ガルシアス王は、供御が皿から消え失せたあの不快きわまる断食日このかたもつてのほかのご機嫌で、だれももううまく執り成せなかつた。大臣と侍従の半分は不興をこうむり、残りの半分は、今に同じ運命が、と戰々恐々とし、こうした気まぐれな怒りの発作をなんとか早く免れようとせつせと思案。侍医はこのために吐剤を処方、近侍は側室を勧め、首座司教^{ヨーロッパ}は苦行を、将軍はサラセン人への十字軍を、主獵頭^{レグニ}は狩りを、式部官は赤山鶴^{アサヒ}の肉饅頭^{パン}、宰風^{モードーム}を提案。というのも、この最後の者については、ナプキンを奪われて以来、あの触れ込みだけだつた御馳走同様、いざこへともなく姿を消してしまつてゐたからだが。こうした一時凌ぎの緩和剤のうち、一番無難なものだから、狩獵が氣散じの手段として優勢になつたものの、一同が期待したような効果は達成されずじまい。王はあの行方不明になつた料理技術の傑作がどうにも忘れられず、朕^{ちん}が思

うにあの消失に関してはなにやらいかがわしいことどもがあつた、などとあからさまにほのめかした。いや、それどころか、腹心の者たちに向かつて、北方^北自身魔法を使つているという怪しからぬ嫌疑がある、と意見を述べた。宮廷には王妃に対する強力な反対党派があつた。王の意向を思うがままにしてきた女が、今や王の気分にとつてどんな位置に置かれているか、彼女の敵たちが見て取るが早いか、この機会を逸することなく活用してあの女を滅ぼすべし、とばかり、陰謀の機運が動きだした。これは、王が狩りの館に滞在していく、アストルガだつたら至極容易に贖罪^{シヨウズイ}の供犠を提供できたはずのあのナプキンの能力が發揮されずじまいだつたので、一層うまくいった。腹心たちの秘密會議で事が充分に練られ、従僕、宮仕えの侏儒^{ジジュー}、道化、侍従、侍医、その他今なお王が喜んで耳を貸すよ

うな者たちによつて、高慢な王妃の没落が決定されると、王は内密に枢密院を招集、これにかの小閣議の裁きを合法的に支持させ、これに基づき判決は即座に執行されたわけ。

ついで宫廷の一部会がこの不運な王妃の遺品を残るくまなく調べあげ、呪符のたぐいとか、魔法の記号、場合によつては悪魔との契約書、もしくはその写し、といつたたぐいの、彼女が魔道にたずさわっていた証拠を探し出そう、と倦まずたゆまず仕事にかかり、あらゆる宝飾品、高価な調度、それから例の妖精の装備一式などがきちんと封印して引き渡されたが、眼力に欠ける司法当局は、苦心惨憺してみたものの、魔術と関わりがあると思われる物件を発見することができなかつた。本来のコラス・デリックイ⁽⁵⁾罪體であるローラントの従士たちから奪つた品々は、何の変哲もない、つまらぬ外見だつたので、これらの魔法の宝具は一顧の価値すらないとみなされたわけ。あの絶妙なナプキンは、元の持ち主が頻繁に使用したせいでどうも見栄えがしなくなつていたが、何も知らない法廷書記の雑巾になつて、墨汁壺がひつくりかえつたとき黒い流れを拭き取るのに使われた。素晴らしい隐形の道具である驚異の親指サックと豪勢な銅貨とは、役に立たない屑としてごみのなかに投げ捨てられた。

王妃ウルラカが地下四十尋の深さに幽閉された陰鬱な修道院でその後どうなつたか、生涯そこで贖罪するよう宣告されたのか、それとも、その後いつか日の目を挙むことができたのか、また、三つの不思議な魔法の道具が徽⁽⁶⁾と鏽と腐敗のせいで台無しになつてしまつたのか、それとも、だれか運の良い者に拾われて、やがては現世の富が行き着く果てとなる塵芥⁽⁷⁾の山から救い出されたのか、こうしたことについて古伝承は深い沈黙を守つてゐる。本当なら幸せの神は、汗にまみれて働いても家族もろとも喘ぎ苦しみ、子鴉たちがパンをせがんで金切り声をあげても、やれるものは涙だけ、といった腹を減らした律儀者の手にこそ、養いのナプキンか金を増やす一文銭を握らせてやるべきだつたのだ。そして、隐形の秘宝は、父親の專制や母親の横暴から愛する乙女を奪おうと、厳しい禁域からいとしい女を

解き放つて偕老同穴の契りを交わすために修道院に突入する、憔悴した無垢の恋人にあたえられるべきだったのだ。けれどもこの下界での通常の物事の運行とは食い違うこうした出来事は突拍子もないとされて、現実には起きっこない。最も望ましい現世の宝はたいていは劣悪な管理下に置かれ、わがまま勝手な幸運は、それを慎ましく道理をわきまえて使うような人たちには昔から拒んできたのである。

気前の良いドルーデ婆さんの餞別をすっかり無くしたあと、まきあげられた元の持ち主たちはこつそりアストルガの町から逃げだした。ナップキン無しでは大膳頭の職能を果たせないアマリンがまず逐電、落とし胤なるアンディオルがそのすぐ後に続く。金子を得るのがあまりにも容易なため、金持ちの道楽者には通有の怠け癖がすっかり身に染みていた彼は、支出に応じて銅貨をひっくり返すのを面倒臭がり、いつもは信用貸しで暮らしており、金庫を一杯にするのは、天気が悪いときとか物見遊山の計画がないときだけだった。さて、債権者たちに負い目が弁済できなくなつたので、彼は即刻身なりを変え連中の目から逃れた。死んだような眼りから覚め、妖精の王を演じることができなくなつたのに気づいたザルロンは意氣消沈して宿にこつそり忍び込み、昔の武具を探し出し、手近な道を取つてこれまた同様に市門から遁走。^{とんきう}

ローラントの従士仲間は、カステイリヤ王国へ向かう街道で偶然出くわした。お互に役にも立たぬ非難をして——そんなことをしても現状は何一つましになるわけではない——角突き合いをする代わり、一同は哲学的な平静さで運命を受け入れた。下された天の配剤は同じだし、思いも掛けず再会したこともあって、以前の戦友同士の友情がすぐさまよみがえった。賢明なザルロン一言あつていわく、友情という籠に当たるのは中庸の道を歩む者だけ。こいつ、上々の運勢とか、すごい才能の持ち主とかとは折り合いが良くないもんだ、と。

かくして三人の朋輩は、このまま旅を続けてカステイリヤの軍旗のもとで元の稼業につき、サラセン人どもにロー



ラント様の死の復讐をしよう、と気を揃えて決定。まもなく願いの的である乱戦の真っ只中に身を置いた。彼らの剣はサラセン人の血を吸い、勝利の棕櫚の葉に包まれて、三人ながらもろともに榮えある討ち死にを遂げたしだいである。

原注 〔その壱〕

(1) 修道誓願させて乾涸らびた坊主どもの仲間にする 絞首刑に処する
(2) ヴェレダは彼女の祖母の曾祖母に当たる とおつしやるが、タキト

ウスの伝えるところによれば、その『同時代史』第四卷六十一節に、ヴェレダは処女だった、とあるのでは。——お答え。さようなことはどうでもよろしい。もちろん彼女とて一度はそうだった。けれども、永久の貞潔の誓いを我が身に課していたかどうかについて、タキトウスは一言も触れていませんぞ。

(3) あるお齧の貴婦人などはあまりに強く擦り込んだので胎児の状態に退行してしまった 伯爵マクス・ランベール殿の筆のすさび『ある紳士の日記』による。

〔その弐〕

(1) ウルラカ この名の姫御前はいざれも評判がよろしくない。これより後代のウルラカの一人、レオン国王アルフォンソ六世の息女で跡継ぎだった女性は、メッサリーナさながら淫蕩で身持ちが悪く、近親過ぎるとの口実で二度目の夫アラゴン国王アルフォンソから去り状を取つたが、それももつと憚ることなく色恋に耽り続けるため。お蔭でいざこざやら戦やら

注

が起つた。彼女はある私生児を産んだ折り亡くなつた。もう一人、これも後代の、アルフォンソ九世の息女ウルラカは、自分の誕生日が名前のせいで王冠をぶいにした。どいつのは、フランスの使節たちがアラゴンの王女たちのどれかを自國の王の妃に選ぶことになつたとき、彼らは醜い王女の方が美貌の王女より好ましいとしたのである。前者の名はブランカ、後者の名がウルラカだつたわけ。

[その参]

(1)あの黄金律 Ne quid nimis. (トトハ語)。Rien de trop. (トトハ語)。Allzuviel ist ungesund. (ズイフ語)。(訳者補足→直訳すれば「多すぎるものは不健康」。つまり「食べ過ぎ飲み過ぎ病のもと」、逆に言えば「腹八分に医者いらす」)。

[その元]

(1)皇姫ローラント シャルルマーニュ(カール大帝)の甥ローラン。中世初期成立と見られる名高い叙事詩の主人公。史実では、ブルタニアの太守で、西暦七八八年八月 frank族の王国を築いたシャルルマーニュがイスパニア遠征から帰還する折り、国境を成すビレネー山中で現地の山岳民バスク族の襲撃に遭い、ローランの率いる戦車の一隊が壊滅したもの。叙事詩「ローランの歌」(シャンソン・ド・ローラン)では、妻の父ガスロンの裏切りにより、おのが指揮する最後尾の部隊が四十万のサラセン軍に挟み撃ちにされたにもかかわらず、先行のシャルルマーニュの主力を角笛を吹いて呼び戻せ、との親友オリヴィエの忠告を聽かずに聞い続け、数々の武勲を頭すが、結局は討ち死にする。今はの際に吹いた角笛で取つて返したシャルルマーニュの軍勢にイスラム教徒は殲滅され、ガスロンは四つ裂きの刑に処される。合戦の場はロンスヴォ、ローランの愛剣の名はデュランダルなど、固有名詞の表記はムゼーウスとはいさざか異なる。

(2)サラセン人 アラビア人を中心とするイスラム教徒のこと。

(3)ピュタゴラス学派的寡默(無言の行) ギリシャの哲学者・數学者ピュタゴラス(紀元前五八二—一四九三)は宗教的・政治的教団を創立したと伝えられる。この教団は教理と指導者の権威への黙従を義務とする厳しい宗規に律せられていたとのこと。

(4)肩打ちをして殿様を騎士に叙任した 貵族の子弟は十四歳くらいから騎士見習い(盾持ち)として武芸その他の騎士にふさわしい教育を受け、二十一歳を迎えると一連の厳粛な儀式の最後に頸または肩を剣で打たれて騎士に叙任される。肩打札を施す者はかつては騎士ならだれでもその資格があつたが、後には王侯にのみ限られるようになった。なお、黄金の拍車は騎士の徵。

(5)ムルナ 動物寓話に出てくる牡猫の名

(6)ペトランカの愛猫の目の玉 ひつやらムゼーウスの取り違えらしい。フランスエスコ・ペトランカ(一三〇七—七四)は愛する女性ラウラへの恋をその詩「カンツォニエール」(Canzonière)で絶唱したが、猫うんぬんは出でない。しかしながら同じくイタリアの詩人トルクア

- (1) エラーラー（一五四四—九五）は、フェラーラで（精神に異常を来したため）大公アルフォンソ（一一世）・デステに監禁されていたとき、一つの十四行詩を書いており、そのなかで夜時折彼の部屋の窓の格子の外にやつてくる猫に、もっとしばしば自分を訪問して、その美しい日で照らしてくれ、と頼んでいる。
- (7) 隠遁修行者（アヌニティ） 原始キリスト教の用語。ギリシャ語。アナコレートはほぼ西暦二百年以降エジプト、シリア、ついでもなくパレスティナの地にも存在した。きわめて厳しい苦行をおのれに課し、肉欲の禁圧と神との神祕主義的合一を達成しようとした。共同体を作ることは稀ではなく、礼拝堂の周辺に小屋掛けをすることもあった。
- (8) 恋愛詩人（ラブ・ライター） 十二・三世紀のドイツの叙事詩人の名称。ミンネ（想い）とは當時宮廷騎士が高貴な、とくに既婚の上臍に捧げた奉仕・崇敬の恋愛感情のこと。これをもつぱら素材とした詩をミンネゲザンク Minnegesang といふ。
- (9) 家の守り神（ペナート） 食料の貯蔵（ラテン語で penus）と家の繁榮を司るローマの神。竈を守るヴェスター・ラールと並んで尊崇された。
- (10) ボアトウの疝痛（ボアトウ） 疝痛（ギリシャ語＝ラテン語 colica）とは激しい痙攣的な腹痛をいう。ボアトウ（Poitou）は昔の南西フランスの州名（州都はボアチエ）。訳者は分かるのはこれだけ。どなたか）高教を。
- (11) ニノン・ル・ランクロ（Anne de Lanclos (Leendos)）（一一六一〇—一七〇五）。Ninon は通称。フランスの高級娼婦。トゥレーヌのさる貴族の娘として生まれ、美貌と才氣で一世を風靡した。拘束を厭い、すべての求婚を断つた。彼女のサロンには第一級の人士（スカラモン、モリエール、フォントネイユ、ラロシュッフローなど）が出入りした。息子たちの一人ド・ラ・ボアシェールは陸軍大臣にまでなった。もう一人ビリエ子爵は初め生母とも知らず彼女に惚れ込み、そのためおのが命を絶つた、と伝えられる。
- (12) 人相学に関する諸断編（ムゼーウス） ムゼーウスが個人的に高く評価していたスイスの神学者ヨハン・カスパール・ラヴァーテー（一七四一—一八〇一）は一七七四—七八八年四巻本の「人間についての知識と人間にに対する愛を促進するための人相学に関する諸断編」(Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnisse und Menschenliebe) を刊行している。このなかで彼は顔の表情と頭部の解剖学的状況から人間の性格を体系立てて帰納的に推論しようとした。ムゼーウスは一七七八—七九年に筆者匿名で四分冊からなる「人相学的旅行の数々、まずは人相学的日記」(Physiognomische Reisen, voran ein physiognomisches Tagebuch) と題した小説を上梓、そのなかで人相学という学問を究明しようとするとラヴァーテーの方針と希望に対し、熾烈な闘争を挑んだ。【ドイツ人の民話】(Volksschichten der Deutschen) においても、ラヴァーテーの熱狂ぶりや博愛主義に偏り過ぎた傾向を皮肉にあてこすつてある箇所が少なくない。
- (13) エンドルの魔女（エンドルの魔女） 旧約聖書サムエル前書二十八章七節以降にイスラエルの王サウルがベリンツィテ人の軍勢の攻撃に絶望して、エンドルなるところに住む口寄せの女に、それ以前に没している士師サムエルの靈を寄せてもらひう記事がある。口寄せの女とは、たとえば我が國の恐れ山などの巫女のたぐいである。聖書にはこの女性が醜い、とか、老齢である、とかの記述はないのだが。

- (14) バシュキール人 ウラル山脈南部に住むタタール系の民族。
- (15) ドルイド 古代ケルト系民族の祭祀階級。ドルイド教はローマ時代のガリア、ブリタニア、ヒベルニア（アイルランド）に広まっていた。ドルイドの聖職者は単に宗教儀式をつかさどつばかりでなく、ケルトの精神文化（博物学、医学、天文学、法慣習）の担い手であり、これらを支配層の若者たちに継承させる存在として公の生活にも影響を及ぼしていたと思われる。ただし彼らは男性のみであり、女性のドルイドはいなかつたようだ。ローマの著作家はケルトの巫女（女占い師、女子予言者）のことをドルイド女と称しているが、ムゼーウスはこれらの伝統に従つているわけであり、また、このドルイドということばを彼は、本来は魔魔を指すドルーデしないドルーム（Drude/Dru）と結び付けている。後出する「ドルーデ婆さん」「ドルーデおつかあ」の訳語では別に注をつけなかつた。
- (16) ヴェレダ *Veleda/Veleda* は古代ケルマニアの女性予言者。ローマの歴史家ブリウス・コルネリウス・タキトゥス（紀元前一七一五四頃）によつて「一度言及されている」[同時代史]（第四巻六十一節）には「この女性、アルクテリイ族出身の乙女は、多くの女性を女子予言者——中略——いやそれどころか神とさえみなすケルマニア人の昔からの習俗にふさわしく、広範な支配力をおよぼしている」とあるそつた。また、「ゲルマニア」でも触れている（第一部八節）。「前略——女にはなにか、神聖なもの、予言者じみた資性が宿つてゐる」と彼らは考えている。——中略——神君ウエスバシアースの時代に、ヴェレダという女が、長い間にわたつて、かの地の多くの人々から、神のようにみなされていたことがあつた」（国原吉之助訳による）。西暦六十九年ローマの支配に対し、バタヴィー族の反乱を指導した、といふ。
- (17) アルトナのシュヴェルの薬 当時はやつていたエキス。とりわけ若返りに効いたといふ。
- (18) アイマール、またはベルマールの侯爵 サン・ジエルマン伯爵（Comte de Saint-Germain）（一七一〇頃—一七九〇頃）の方が我が国ではいくらか通りが良いかも知れない。ボルトガル生まれの冒險家。標記の自ら名乗つた称号のほかにまだ幾つもある。一七三四年オランダのハグに姿を現し、一七四一—四六年イギリスに滞在、ほは一七五八年以降フランスでルイ十五世の愛妾ボムバドウール夫人の寵を受けた。一七六〇年ハーグにおいてフランスとブロイセンの間の和平を勝手に斡旋しようとして失脚、イギリスへ逃亡、一七六三年から六四年までブリュッセルに、一七七〇年にはイタリアに姿を見せてゐる。ついでモスクワへ商人となり、一七七四年以降アンスバッハ辺境伯アレキサンダーのもとに、一七七九年以降ヘッセンの選帝侯カールに仕えてシュレスヴィヒに滞在、そこで没する。彼は、ダイヤモンドを作る技術を心得てゐる、とか、未来が予知できる、とか、不老の靈薬を使用してゐる、とかと自慢した。秘奥の諸力に通じ、二千歳から三千歳の齢を保つてゐたとする伝説もある。当時のドイツではこの物語はとくにラムベール伯マクシミリアン・ヨゼフの「ある紳士の日記」により有名になつた。これは一七七五年フリードリヒ・レオポルト・ヴァーゲナーのドイツ語訳でフランクフルトで出版された。
- (19) ドルイドの神聖な寄生木 寄生木の枝はケルト人の間では神聖な物だつた。これには諸々の魔力が秘められているとされた。
- (20) キルケの魔法の杖 ホメロスの「オデュッセイ」に登場する魔女キルケ（太陽神と月の女神の娘）はこの杖で人間を獣に変える。オデュ

ツセウスの家来たちはこのため彼女に豚に変身させられる。オデュッセウスは彼女に強いて部下たちに元の人間の姿を取り戻させる。

- (21) ツエルズスの定理 未詳。ただしツエルズスとは西暦一世紀前半に生きたローマの著作家アウルス・コルネリウス・ケルスス (*Aulus Cornelius Celsus*) と思われる。一種の百科事典を著したが、そのうちの八巻を占める『医術』(*De medicina*) は医学についてのローマ時代の最も有名な著作であり、ヒポクラテス以降の医術に関する最も重要な記述である。

- (22) テーベの百の門 テーベは上エジプトの古都。紀元前一千年前には王国の重心が下エジプトに移ったため衰微した。「百門のテーベ」と美称された。ルクソール、カルナック、クルナ、メディネト・ハブはかつてのテーベの跡である。

〔その式〕

- (1) アルゴス 全身に無数の目があるとも、前と後ろにあるとも伝えられ、「すべてを見る者」と綽名される怪力の巨人。ゼウスの妃ヘラの言いつけで、ゼウスが寵愛したイオをヘラが変身させた牡牛の見張りをしていた。そこをゼウスの命令でイオを救い出しにきたヘルメスに哀れや殺されてしまう。

- (2) ヘック銅貨 *Heckpfennig* 権限のない貨幣鋳造所で作られた、特に十七世紀の粗悪な銅貨のこと。いわば我が国の鎌銭に当たる。しかし民間信仰によれば、これを財布のなかに入れて置くと、金を増やしてくれる、ということになつており、その意味では我が国の縁起銭に相当する。

- (3) ザカリア頌歌 (*ベネディクトゥス*) 新約聖書ルカ伝一章六十八節——七十九節のザカリア(後の洗礼者ヨハネの父)による頌め歌。聖務日課および葬儀の際に用いられる祈禱文。

- (4) ラスペルバン *Raspelkennel* 未詳。何かの小粒をまぶしてある白パンだらうとは思うが。

- (5) マヨルカ焼き スペインのマヨルカ島産の陶器。マジョルカ焼き。

- (6) 奉仕の靈 本来は天使のこと。新約聖書ヘブル人への書一章十四節「御使みづかひはみな事へまつる靈にして(後略)」。ムゼーウスは「召使の精靈」ほどの意味で用いている。

- (7) マルヴァーアジー葡萄酒 元來はギリシャ産の、リキュールのようく甘く濃厚な上質葡萄酒。特に白。ラコニアの町ナボリ・ディ・マルヴァーアジーにちなんだ。しかし、他のギリシャ諸島や、マデイラ島、アブレス諸島、テネリフェ島、サルティニア、ボルトガル、フランスのプロヴァンス地方産の似た風味の酒もそう呼ばれた。蜜のようになつて硬い葡萄酒で、かつてはさつぱりした辛口の白よりこのような酒が好まれていたのである。濃厚さを得るためにブランデーを補強したり、加熱処理をしたりする醸造元もあるそなう。現代「マルヴァーアジー」ということばが葡萄酒業界で何を指すかはかなり混乱しているようだ。葡萄の品種を指すこともある。

(8) 美酒 ^{おとる} ギリシャ神話の神々たちがオリュンポスの高みの果てしない饗宴で飲む酒がネクタル、食べる物がアムブロシア。ネクタルは当時のギリシャ人が美酒はかくあるべきだ、と考えた理想的の極致か。至高の甘美さを持つ葡萄酒ということになる。

(9) あの昔のシユラクサイの哲学者 ^{言わざと知れたヘニズム時代の数学者・機械学者アルキメデス(紀元前一八七頃—一二一)。} シチリア島の都市國家シユラクサイの人。入浴中に「アルキメデスの原理」(固体の全部または一部を流体中に浸すと、それが排除すると考えられる流体の重さに等しいだけ、見掛けの重さが減じる)を入浴中に発見し、裸で街路に走り出、そこで「ユーレーカ(私は見つけたぞ)」、と叫んだ、

(10) レオン王国 ^{アストゥリアス王国のオルドニヨ一世がガルシア、レオン地方を統合し、レオンを首都とするレオン王国を九一四年建設。} 一〇三七年カスティリヤ国王フェルナンド一世に併合されるまで存続。

(11) ギューゲス ^{ギリシャの史家ヘロドトスの「歴史」(巻一・八一二節)によれば、妃の美しさを人前に見せて誇りたかったリュディアの王カンダウレスは、寵臣ギューゲスをひそかに招き入れ、入浴中の妻の裸体をとくと見させた。これに気づいた王妃は激怒し、ギューゲスに命じて夫を殺させる。その代償としてギューゲスは妃と結婚、新たに王朝を創始する(メルムナダイ朝^{注17}参照)。プラトンはその著「共和国」のなかで、ギューゲスは姿を見えなくする魔法の指環をつけて、王の部屋に隠れていたのだろう、と解釈している。そこで伝説が生まれ、十九世紀に至ってもゴーティエ、ヘッペル、ジードなどがそれを素材としている。}

(12) フォルトゥナートウスの財布 ^{いくら遣つても常に金が一杯に詰まっている財布。一五〇九年に最初の印刷が出た民衆本(Volksbcher)の主人公、商人フォルトゥナートウスは、この財布とどこへでも好きな場所へ運んで行ってくれる願い帽(Wunschkutlein)を授かる。この二つを相続した彼の息子たちは不幸に陥る。この話は広く流布し、後代にも伝えられて演劇などの素材となつた。}

(13) 聖者レミギウス ^{現在フランスのマルヌ県の首邑である古都ランスの司教。サン・レミ。在世四四〇年頃—五三五年。伝説によれば、フランス族の王クロドヴィヒ(クロヴィス)に洗礼を施すことになった折り、一羽の鳩が香油の入った壇を天から彼のもとに運んで来た、といふ。これにちなみ歴代のフランス国王は、ランスの大聖堂(大司教座)に保存されているこの壇から香油を注がれて戴冠することになつていていた。}

ただし、これだけの知識では本文の記述は理解しがたい。大方のご高教を乞う。

(14) アストルガ ^{イスパニア北部アストゥリアス地方の中心都市。三世紀以降司教座がおかれて、古代ローマの遺跡がある。アストゥリアス地方からイスパニアの国土回復運動(レコンキスタ)イスラム教徒支配からの脱却とその諸王国の征服)が始まつたので、歴代イスパニア国王はこれを記念してアストゥリアス大公の称号を帯びる。アストゥリアス人の王国はやがてレオン王国となる(注10参照)。}

(15) スブルルピア国王ガルシア ^{アストゥリアス王国のガルシア一世(九一一九一四)から思いついたか。}

(16) アラゴン ^{アストゥリアスと同じくイスパニア北部の地方。中心都市はサラゴサ。一〇三五年以降独立の王国となり、一四六九年フェ}

ルナンド二世がカスティリヤ王国の女王イサベラと結婚、両王国は同盟を形成、やがて統合されてイスパニア王国となる。

- (17) クロイソス リュディア王国（メルムナダイ朝）の最後の王。紀元前五六三年父アリュアッテスの跡を襲い、エフェソスを占領、小アジア沿岸の他のギリシャ人都市にも納税義務を課し、ハリユス河畔にまでその支配権を伸長した。その治世下で王国は最盛期を迎へ、首都サルデイスに蓄えられた彼の財宝は謡になつてゐる。それゆえ、クロイソスのような人、といえば巨富の所有者を表現することとなつた。ヘロドトスによれば、ここでアテナイの哲人ソロンが彼に会つたという。彼は新興のペルシアの国王キユロス（二世。大王）に対抗して、新バビロニアのナブナイト王、エジプトのアマシス王と同盟、ステリア近郊で戦つたが決着はつかなかつた。結局キユロスがヘルモスの平野で勝利を收め、五六年サルディスを占領。クロイソスは捕らわれ火刑台に上げられたが、そこで述懐を聞いて心を動かされたキユロスに赦されて彼に仕え、その息子カンビュセス（二世）王の助言者となつた。この逸話はヘロドトスの「歴史」（卷一・八六一八八節）に詳しい。
- (18) 輪突きの早駆け Ringelrennen 馬を駆けさせながら槍で輪を突き取り、その巧妙さを競い合う騎士の遊戯。
- (19) ヘリオガバルス 元来はシリアのエメサで崇拜されていた太陽神の名だが、ここではローマ皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌス・アウグストゥス（在位一二一八一二三）のこと。エメサの太陽神の神官長だったが、その美貌とカラカラ帝の息子であるとの噂によりローマ諸軍団の好意を得、十四歳で皇帝に推戴され、ローマで專制的かつ奢侈な支配をおこなう。短い治世の最後に殺されて、ティベル川に死骸を投げ込まれる。彼の饗宴ぶりについては、【後期皇帝伝】のなかでアエリウス・ラムプリディウスがまとめた「ヘリオガバルス伝」に詳しく述べるが、これを紹介した塚田孝雄氏は「桀王、糸王と同じく天下の悪がこの人に集中してしまつたのだろう」（【シーザーの晩餐】朝日文庫）と穏やかに一言している。
- (20) 廉弱 食物が胃のなかで消化されて弱状になつたもの。
- (21) 諸王のなかで最も賢明な王 ソロモン王。旧約聖書のソロモンの箴言十九章十一節にいわく「王の怒りは獅の吼ゆるが如くその恩典は草の上におく露のことし」。
- (22) コション・ファルシ・アン・オウ・ダウ cochon farci en haut goût 直訳すれば、薬味のよく効いた詰め物をした豚。内臓を抜いてさまよわざの美味な詰め物をし、薬味を効かせて丸焼きにした乳呑み豚（生後六ヶ月以内の豚）のこと。ここでは明らかに、当時のフランスの料理の本か雑誌かに載つていたきちんとした調理法が、ムゼー・ウスの念頭にあつたに違ひない。
- (23) 動物精気 Lebenseist 哲学用語。人体のなかを循環し、微妙な生命機能を掌む液体。
- (24) 始末屋のツォップと後継家のヒルマー・クーラス ヨハンネス・ハインリヒ・ツォップ (Johannes Heinrich Zopf) とヒルマー・クーラス (Hilmar Curas) の世界史教科書は十八世紀に広く普及した教科書。
- (25) 悪評紛々たる古代ローマ版サルダナバルスども 奢侈浮蕩な饗宴に明け暮れたローマ皇帝ガルバや既述のヘリオガバルスを指す。サルダ

ナバルスはメディア王国やベルシア帝国の言い伝えによればアッシリア帝国最後の王。さまざまの行状が伝えられているが、とりわけそれまでのアッシリアのいかなる帝王にも比を見ないその洒脱肉林の饗宴ぶりや柔弱さが有名。近世の詩人たちが好んで文学上の素材としており、最も名高いのはバイロン卿の『サルダナバルス』。

(26) アピキウス 紀元一世紀、皇帝ティベリウスの時代のローマの食通で料理技術の執筆者マルクス・ガヴィウス・アピキウス。アテナイオスの『ティブノン・フィスター』(食卓の学者たち)にはそのグルメ(美食家)といおうかグールマン(食いしん坊)といおうか、飲食に途方もなく達している逸話が記されているし、アナエウス・セネカの『書簡選』によれば、大富豪で飲食に一億セスティルティウスを蕩尽、残りが僅か一千万セスティルティウス(金塊七五〇キロに相当)しかない、と分かったとき、この程度では満足の行く暮らしができないとして、毒を仰いで自殺した、とある。【古代ローマの料理書】(原題は"de re coquinaria"=料理法)なる調理法集成(ミュラリヨコタ宣子訳・三省堂)の著者がアピキウスを名乗っているが、しかしこの本は早くも三世紀のものである。中には明らかに彼の死後の文献も混入。だだしあとでローマの料理書と呼べるのはこれのみ、とのことである。

(27) 宮宰(マヨールドームス) 元来はメロヴィング朝フランク王国の最高の官職で、行政・財政面の長を指す。カロリング家の出のカール・マルテルがこれに就くと、王国の実権を掌握、その子ピピン三世の時代になると、メロヴィング朝最後の名目上の王ヒルデリヒ三世を廢し、カロリング朝フランク王国を創始する。ピピンの息子がカール大帝(シャルルマーニュ)である。

(28) 冥府の忘却の川レテ レテはギリシャ語で「忘却」を意味する。冥界への入口やその周辺にあるとされる五つの川の一つ。冥府へ赴いた亡者が前世のこと忘れため飲むところだが、あるいは、転生する折りに、この水を飲んで新しい人生に出発するとも言われる。

(29) アルカディア 古代ギリシャの南部ペロボンネソス中央高原。安穏で素朴な牧歌的生活が送られる理想の地を指すのに用いられる。

(30) ヴアン・ダイク アントニス・ヴァン・ダイク(一五九九—一六四二)。ネーデルラントの画家。彼はルーベンスと並んで十七世紀フランダース派の最も重要な画家である。フランダース派は農民など庶民の生活の一こまを好んで画材として取り上げたので、ムゼウスはこのように記しているが、彼自身にはこの種の絵はほんの少ししかない。フランマン人は現在ベルギー北部とフランスの一部に住むゲルマン系の住民。

[その参]

(1) ヨブの報らせ(凶報) 旧約聖書ヨブ記の主人公ヨブは、富み栄え、子女にも恵まれていたが、工ホバは彼を試みるためにその一身を除き、家族所有物をすべてよいようにせよ、と任せる。そのためヨブは相次いで凶報を聞く。

(2) 典雅の三女神 クラディアエはラテン語。ギリシャ語ではカリヂアード。すなわちアクライア(輝き)、エウプロシュネ(喜悦)、タリア(榮え)の三柱。
 (3) 王の御名において de par le Roi フランス語。フランス王国で王命を執行する際用いられた用語。

解説

- (4) 罪體 corpus delicti 犯罪を証拠立てる物件。殺人事件なり死骸、凶器などを指す。
- (5) カステイリヤ王国 九三〇年頃レオン王国のアルゴス辺境伯フェルナンド・ゴンサレスが周辺を征服してカステイリヤ王国として独立。女王イサベラがアラゴン国王フェルナンドと同君連合を形成してイスパニア王国が誕生するまで継続。一四九二年のイスパニア王国回復運動(レコンキスタ)の始てに至る。

十六世紀初頭以降無数に成立し、十九世紀に入るまで手を変え品を変え出版された騎士道を種にした民衆本 (*Volksbücher*) の一つに次のようないつものがある。【ローランの三人の徒士たか】ロングヴァルの不幸な合戦のあと彼らの身に起りたる多くの魔術不思議な事いも (Die drei Rolands Knappen, mit welchen sich nach der unglücklichen Schlacht bei Ronceval viele merkwürdige Begebenheiten ereigneten)。これはカール大帝とその親衛騎士たちにまつわる伝説のサーケル——シャルムーニュ(伝説)——と密接な関わりを持つもう古いフランスの韻文詩 (後代「シャンソン・ド・ローラン」と呼ばれるのはその一つ)に基づくものである。もちろん筋はほとんどパロディめいており、ずっと後代の成立ではあるが。

ムゼーウスは冒頭でロンスヴァルの合戦の最後の情景をざっと記している。巨人フェラクトウスとの騎討ちその他の件なども民衆本によつているので、現在訳出されている「シャンソン・ド・ローラン」(ローランの歌)の厳めしい語り口に馴れていた現代の我々には、不謹慎な感じがするかも知れない。が、この発端は、この物語の大筋とはほんの僅かの結びつきしかないにしても、騎士の郎党である三人男(徒士、すなわち徒士侍の身では、いくら功名を挙げても、騎士に叙任されることはまずありえない)が繰り広げる一連の雅びやかならざるアヴァンチュールの数々にはそくわないこともない。そして彼らの世渡りの筋書きは、フォルトゥナートウスとその願い帽および幸運の財布を中心とする民衆本と、その構成・様式においてきわめて類似している。ここでは年取った魔女の姿を取つてゐる偶然あるいは幸運は、魔法の秘具でおもしろおかしい経験を味あわせてくれるが、主人公たちはしばらくは名声榮誉を手にして、結局はせつかくの機会を棒に振つてしまつ。

しかし民話の世界で類話を探すと、このように実人生に近い筋書きは好まれないようだ。結構な魔法の道具を入手した一人、あるいは三人の主人公は、一旦は敵役にそれを奪われるが、捲土重来、再び我が手に取り返し、敵役にしたたかな報復をもやつてのける。

クリム兄弟の「子どもと家庭のための昔話」(Kinder- und Hausmärchen)で例を求めれば、左のようなものが挙げられようか。

- (1) 「お膳やご飯のしだくと金貨を生む驥馬と棍棒袋から出る」(KHM 36 Tischchen, deck dich, Goldesel und Knüppel aus dem Sack)
- (2) 「背囊と帽子と角袖」(KHM 54 Der Ranzen, das Hutelein und das Hörlein)
- (3) 「黄金の山の王様」(KHM 92 Der König von goldenen Berg)
- (4) 「キャベツ驥馬」(KHM 122 Der Krautesel)

最後の話に出てくる呪具は訳注〔そのまゝ〕(註)に記したフォルトゥナートウスの授かつた魔法の道具とほぼ同じ。

(11000年一月一二十四日 受理)